**№27　テーマ『人間的魅力の形成』**

**講話日2002年11月18日**

**芳村：今日は、今年の研修、僕の研修ですけど、私の出番は、今年は今日で終わりでですね、また来年、やらせてもらえるかどうかわかりませんけども、一応、今日で今年の締めくくりをしたいと思っております。前回は、人間として本物とはなんなのかという、そういうふうな話でですね、人間として人生を生きる場合の基本的な心構えのようなことを、お話をしました。今日はそれに続いて、この人間の格というかですね、人間性をさらに磨いていこうと思ったら、どういうことをしなきゃならんかという、そういう実践論をですね、お話をしたいと思います。レジュメに沿ってお話をさせてもらいたいと思いますけども、今日の全体的なテーマは、人間的魅力の形成というテーマですね。**

**前回、人間が人間の格というものを持つための努力として、どういうことをしたらよいのかということを、お話をしました。前回の中で一番、基本的に大事なことはですね、この現実を生きるためには、答えはなければならない。だけども、答えに縛られてしまっては、そこで成長が止まってしまう。答えに縛られないためには、なおかつ、問い続けなければならない。問いを見失ってしまったら、その人間は成長が止まって終わりの人間だ。問い続けることによって、初めて成長は可能になる。だけども、現実を生きるためには、答えはなければならない。答えを持ってなけりゃならないけど、答えに縛られてはならない。この一見、矛盾に見えるね、この考え方というものをですね、よくこう、わかっておいてもらいたい。答えは必要だけど、答えに縛られてはならない。答えに縛られた人間は必ず他人を批判する。そして、自分と違う考え方を否定する。対立をつくり出してしまう。結局、組織や社会を破壊する人間になってしまうんだ。答えを持っておっても、答えに縛られないなおかつ、問い続けることによってですね、会社も発展し、自分も成長し、また、このいろんな社会の秩序というものがですね、高度に成長していく。そういうふうなことになるわけですね。ぜひ、その問題意識、問いというものをですね、失わないようにしてもらいたい。それが、一番最初のね、大きな問題でした。**

**実際問題、人間の格というものをですね、つくっていこうと思ったら、３つのこの目標を持って努力しなければならないと。１つは、不完全性の自覚からにじみ出る謙虚さ。いろんな意味において不完全ということをですね、徹底的にわれわれは忘れてはならない。不完全でいいんだっちゅうんじゃなくてですね、不完全であるということは、どういう状況でも避け難い。だけども、であるが故にですね、より完璧なるもの、より完全なるもの、より絶対なるものを求め続けていく。そこにこの仕事の厳しさが出てくるわけですね。ですから、まずは不完全性の自覚からにじみ出る謙虚さというものを持ってなけりゃならないけども、それだけでは人間ではない。その次に大事なことは、より以上を求めて生きる。常に何かしら、より以上という、そういうこの人間的なですね、成長意欲を持って、その自分を成長させていくという、そういうことをこう、忘れてはならないと。不完全性の自覚からにじみ出る謙虚さにプラスすることの、この人間としての成長意欲ですね。それを持ち続けなければならない。**

**そして、最後の３番目の、この人格をつくっていく条件というのは、社会性という観点からね、出てくるものですけども、自分の価値は他人が決定する。自分がどんなに素晴らしい能力を持っておっても、他人に評価されなかったら、その人間は一文の価値もない人間だ。ゼロの人間だ。他人に評価されてなんぼというのがですね、現実社会ですから。そこに社会の厳しさがある。自分がどんなに勉強して、偉いと思っとってもですね、それがほかの人の役に立って、感謝されるようなものにならないと、評価されませんから。評価されなければ、どんなに力を持っておっても、現実的にはゼロの人間ということになってしまう。その意味で、この人の役に立つことを喜びとする感性というものをですね、われわれは、この持つことを、努力しなくてはならんのですけども、だけども、この人に喜んでもらって自分がうれしいというのは、これは愛の精神ですから、どんな人間にもその気持ちは本来あるんですけども、だけども、理性的な人間になってしまうと、それが抑えられてしまってね、感性の働きが抑えられてしまって、そして、その人の役に立つことを喜びとする感性というものが命から出てこなくなってしまって、ついつい自分本位、自己本位、身勝手というね、そういう状態になってしまいやすい。**

**だけども、本来、感性というのは、人に喜んでもらって、それが感じられると、自分もうれしいというね。そういうこの気持ちが湧いてくるものであります。それは人間そのものが社会的存在だから、だから、社会性の原点というのは、人間の命の中に原理としてあってですね、それがにじみ出てくる。もうとにかく、第３番目の人間、本物の人間の条件というのは、この人に、人の役に立つことを喜びとする感性というものをですね、持ってなければならない。この不完全性の自覚からにじみ出る謙虚さと、それから、人間としてもっともっと成長したいという成長意欲と、それから、人の役に立つことを喜びとする感性。この３つさえですね、自分が持つことを目標に努力しておったらならば、必ずそこに人間の格というものが表れ出てくると。**

**そこで、その３つの努力を通してですね、このにじみ出てくる人間の格の内容とはいったいなんなのかということですけど、それがその次に書いてある理性的魅力と感性的魅力と肉体的魅力。そして、最後に人間力。この４つのものがですね、この人間の格、人格の内容として表れ出てくるわけであります。自分自身が本物の人間になろうとして努力をするというですね、先ほどの人格の３条件というものを意識しながら、自分を磨くというか、自分が生きておったならばですね、必然的に人間の格というものの内容が備わってくるわけであります。この理性的魅力とはなんなのか。理性的魅力の中にも３つの内容がありますし、感性的魅力の中にも３つの内容がありますし、また肉体的魅力の中にも３つの内容があります。人間は理性、感性、肉体という３つの要素からできてますから、だから、原理的にいって、人間には理性的魅力、感性的魅力、肉体的魅力と、３つの魅力があるはずなんですね。また現実にそういうふうになっております。**

**またそれを別の形でまとめればですね、その全体を人間力という言い方で、最近はよくいわれるようになってきました。あの人には人間力があるとかですね、人間力がないとかっていう仕方で、その人を評価するような、そういう言葉が最近はよく使われます。その違いも、今日はお話をしますけども、とにかくこの人間的魅力、すなわち、人間の格というものを持ったとき、どういうこの内容がですね、この人間らしいものとして出てくるのかということをまずは、この知ってもらいたいと。理性的魅力の中に３つ、その内容がある。それはなんなのかといったら、知識の量ですね。まずは知識の量というものが、人間を感動させる理性的魅力の第１番目です。知識の量。それから、２番目は知恵ですね。知恵が湧いてくるという、なかなか、あいつは知恵者だなというですね、知恵というのは、知っておるわけじゃないんだけど、なんか問題にぶつかると、名案が出てくるというのがね、知恵ですね。それから、第３番目は、天分というね、この天から人間に与えられた、その人間が世界一になることができる能力。どんな人間でも、みんな自分が世界一になれる能力というものをですね、先天的に与えられて生まれてくるんですね。ただ、それに出合わない。またそれに気付かない。またそれを発見しようと努力をしない。であるが故に、その自分が世界一になることを自ら放棄してるだけであって、本当にそのことを意識してですね、自分が世界一になろうとすれば、誰でもなれます。天分のツボにはまれば、誰でも世界一、オンリーワンかナンバーワンか。どちらかで世界一になれるわけですね。**

**これも今までの話の中でね、天分の発見方法っちゅうことをね、申し上げましたからね。ひょっとしたら、誰か、そのことをヒントとして、よし、俺は世界一になったろうやないかというんで、そういうことでこう、頑張ってる方もいらっしゃるかもしれませんけどね。だけど、なかなか人はいい話を聞いてもね、そんなことは俺には無理やといってやらないんですよね。いい話を聞けば聞くほどね、それは理想論だと。現実的にはそんなこと言われたって無理やっていうのがね、ほとんど99.9％のね、人間の意識ですよね。だから、なんともならん。だから、うだつが上がらないことになるんですね。いい話を聞いたらね、やる気のある人間はね、どうしたらそれができるのかということを真剣に考えるんですよ。だけど、やる気のない人間は、みんな異口同音にどう言うかといったら、それは素晴らしいことはわかるし、いいことはわかるけど、それは理想論だと。現実的には無理だ。なんでそんなこと、言うようなことになるのかといったら、やる気のない人間っちゅうのはですね、今、自分の持ってる力でできることしかしようとしない。今、自分の持ってる力でできんことは、不可能だと言ってしまうんですね。だから、今、自分の持ってる力でできることしかしようとしないで、今、自分の持ってる力でできんことは、不可能だってやらんという状態は、絶対成長できないということですからね、これは。**

**だけど、常に成長する人間は、自分の力の限界に挑戦して、そして、不可能を可能にしていくというのが、成長する人間の生き方ですからね。また、そこに、その最近、NHKで有名になったあの『プロジェクトX』のね、あの素晴らしい感動のドラマがそこから始まるわけですからね、不可能を可能にする。とにかく皆さん方もですね、その自分には必ず、俺が世界一になれる能力というのをちゃんと与えられて、持って生まれてきてるんだ。それに出合ったならば、それを自分が見いだしたならばね、俺は世界一になれるんだ。どうしたら、俺は世界一になれるかというね、そういうことを、ぜひ考えながらね、あの、頑張ってもらいたいんですよね。**

**今、日本はですね、アメリカに代わって、これから世界人類の目標になるような国家にならなければならないんですよ。どんな仕事をする場合でも、俺はこの道で世界の頂点を極めるんだと思わなければならない。建築会社でもね、世界にたくさんありますよ。だけど、どっかの国の、どっかの会社が、常に世界一なんですよ。世界一になろうと思ったら、なれるんですよ。ただ、その志を持つか、持たないかなんですね。だけど、世界一の建築会社になろうと思ったら、社員一人一人が、その自分の今の持ち場において、俺は世界一の営業マンになるんだ。俺は営業マンとして、世界の頂点を極めるんだと。やがて、世界の人類が俺を目標に努力するんだっていうね、そういうふうなこの気持ちを持ったならば、その会社は確実に世界一の、その同業者間でね、世界一といわれる会社になりますよ。とにかくこれからは、アメリカに代わって日本がね、いろんな意味で、この世界の目標となる国家にならなければならない。**

**アメリカはかつてはね、世界の目標だったけど、いまや世界からの信頼をなくしてしまってですね、あまりにも言うことが独善的であるがために、世界の信用をなくしてしまっておる。そして、そのアメリカはもうすでに頂点を済んだ国家であって、老体国家への道を歩んでおる。これからの人類をより素晴らしい未来へと導いていく実力を持ってるのは、今の世界で日本だけだ。日本はこれから、あらゆる職業において、世界の頂点に立たなければならない。そのためには、一人一人の日本人がですね、今、自分のしておる仕事においてですね、俺はこの仕事で世界の頂点を極めるぞ。俺はこの仕事で世界の頂点に立つんだ。そういうふうなですね、意気込みを持って努力しなきゃならんときを、今、日本は迎えてるんですね。そのためにもね、この自分が世界一になれる能力、分野という、天分というものを自分が見いだして、そこで頑張るというですね、そういう頑張り方をしていかなければなりません。とにかくそのことも含めて、理性的魅力には３つの魅力があります。知識の量。これは今、自分がしておる仕事においてですね、今、自分のやってる仕事において、その仕事に関わる学問的知識をとことん求めていくと。この学問的知識というのは、これは、その時代に生きる人間であるならば、誰もがそうだと認めなければならないという、根拠が与えられてるもんですから、だから、その今の自分の仕事に関わる学問的知識をどの程度、持ってるか、どの程度の水準の知識を持ってるか。それがその社会に生きる人間の、みんなから信頼され、信用されるという、その資格をつくることになるわけですね。ついつい、この世の中に出てしまうとね、学生時代は、学問をしてますけど、世の中に出てしまうとですね、学問との関係性を忘れてしまって、ほとんどの人間が自分の体験、経験だけで仕事をしてしまうことになってしまいやすいんですよね。だけど、体験、経験というのは、個の限界を超えられない。体験、経験は個人的なもんだ。だから、体験、経験は個の限界を超えない。だから、多くの人間の信頼を体験だけでは獲得できないんですね。**

**社会の中で多くの人間の信頼を獲得してね、そして、どんどんと自分がみんなから信頼されて、そして、たくさんの仕事が舞い込んでくるということになろうと思ったならば、自分の体験、経験というものを学問的知識の基礎の上に立脚させなければならない。体験、経験も大事なんですよ。だけども、体験、経験そのものは、個の限界を超えない。個人的なもんですからね。だけど、その自分の体験、経験を学問的知識の根拠の上に立脚させたとき、限りない自信が人間から湧いてきます。とにかく、学問的知識というものは、その時代に生きる人間であるならば、誰もがそうだと認めなければならないという根拠が与えられておるもんですから、その学問的知識というものを自分の仕事に関わるものとして、どれだけ自分が持つことに努力してるか。どれだけ持っておるか。もうこれは、絶大なる社会的信頼、信用の基礎になります。**

**実際問題、テレビに出ていてもね、普通の人が言ったんでは、あんまり、そんなにこう、みんなそれを受け入れようとはしないんですけど、大学の先生が出てきて、こうです、ああですと、ああ、そうかと思ってこう、すぐ信用してしまうんですね。それぐらい学問的知識というものは人間を信用させる魔力があるんですよね。必ずしも大学の先生が言ってるから正しいわけじゃないんですけどね。だけども、一応、その学問をしてる人が言うから、そうなんだろうと思って、すぐ信用してしまうんですね。もうそれぐらいの信頼度が社会にはあるわけです。だから、自分が仕事をする場合でも、自分の言うことに、こういう学問的根拠があるんですっちゅうことを言うのと言わんのと、全然価値が違いますよね。そういうこともね、やっぱり考えながら、われわれは、自分が何を自分のものにしていくべきか、獲得していくべきかっちゅうことを、やっぱり考えながら、努力の方向性を決めなければならないですよね。**

**とにかく、この理性的魅力というものには、３つの魅力がある。知識の量、それから、知恵ですね、知恵。知恵が湧いてくる。知恵が湧いてくる人間になろうと思ったら、どういう努力を、このセントバーナードかですね、どういう努力をセントバーナードか。どういう努力をせんといかんかと申しますと、この知恵が湧いてくる、そういう状態になろうと思ったらですね、この今、自分が持ってる力でなんともならんという状況にまで自分を追い詰めていくということをしないと、知恵が出てくる順番が来ません。今、自分の持ってる力でできてるという状態では、知恵が湧いてくる必要はないですからね。今、自分の持っている力でなんともならん。だけど、なんとかしたいと思っていると、潜在能力が湧いてくる、知恵が湧いてくるという構造が命にでき始めるんですね。そんな意味で、知恵者になりたいと。なんにも知識はないんだけど、知恵で勝負する人間になりたい。**

**そんなことは、何も知恵がないということ、何も知識がないということは絶対ないんですけども、一応、その知恵という力で勝負ができる人間になりたいと思ったならばね、われわれはどういう努力をする必要があるかといったら、自分のこの力の限界に挑戦する。自分の力というのは、知力の限界、気力の限界、体力の限界に挑戦する。そういう限界への挑戦という生き方が身に付いてくると、知恵がどんどこ、どんどこ湧いてくるというね、そういうことになってしまって、べつにそんなにめちゃめちゃ考えてるわけやないんやけども、ちょっと考えると、すぐ湧いてくるって、そういう構造を持った命ができるんですよね。知恵者というのはそういうもんです。今、自分の持ってる力で、できることしかしようとしないという人間は、もう一生、知恵なんか湧いてこない。今、自分の持ってる力でなんともならん。だけど、なんとかしたいと思うと、命から湧いてくるっていう構造ができてね、その湧いてくるものが潜在能力というふうにいわれるものですが、その潜在能力は知恵なんですよね。知恵。こうしたらどうやと、そういうヒントを知ってるわけじゃないけども、こうしてみたらできるんやないかって、そういうこのアイデアがね、湧いてくるわけですね。そういうこの限界への挑戦というね、生き方を自分に課する。あるいは、それができるような、そういうふうな生き方をですね、しなきゃなりません。**

**もう１つ、天分ですね。もう天分については、もう今まで何回も申し上げましたけれども、とにかくは、もう自分が世界一になれる能力、自分が世界一になれる分野というのをどういうふうに発見するか。これは５つの方法があってね、皆さん方もノートに書いてもらってるかもしれませんけど、５つの天分の発見方法があって、それはやってみたら、好きになるかどうか。やってみたら、興味、関心が湧いてくるかどうか。やってみたら、得手、得意と思えるかどうか。他人とやったら、いつも自分のほうがよくできてしまうかどうか。真剣に取り組んだら、問題意識が湧いてくるかどうか。この５つが、この天分の発見方法。自分にのみ与えられた個性的な能力ということですね。それを発見する方法は、その５つしかありません。この５つの天分の発見方法が、イコールそのまま、この成功した人間のタイプというものをですね、意味しておるわけであります。**

**成功した人間というのは、この５つのどれかで成功しておるのであって、そのほかに成功する方法はないんですよ。好きなことをやって成功するか。興味、関心のあることをやって成功するか。得手、得意のことをやって成功するか。他人よりもよくできてしまうことでもっと頑張るか。あるいは、問題意識に人生を懸けたか。この５つしかね、人間の人生において成功する原理はないんですよ。成功した人間は、必ずこの５つの中のどれかで成功してるんですよ。偶然ながら、その成功の原理がそのまま、そのまんま東と申しましょうかね、『さんまのまんま』と申しましょうか。この成功の原理そのものが、そのまんまでですね、天分の発見方法とぴったんこ一致するわけですね。ということは、だいたい成功した人間は、天分のツボにはまって成功したんやっちゅうことになるわけですね。結果としてね。それを考えるならばね、どんな人間でも、その天分のツボにはまる方法をですね、天分の発見方法というものを使えば、ちゃんとそのツボが出てくるんですから。もうその方法で生きるっきゃないなということになりますよね。ぜひこれもね、はははんとこう、のほほんと聞いてるんじゃなくって、真剣に受け止めて、自分づくりというものにね、ぜひ生かしてもらいたいんですよね。**

**とにかくこれから日本は、あらゆる職業の分野において、世界への挑戦を極めなければならない。これから全世界は、日本を目標に努力することになるんだ。また、すべての日本人は、今、自分がやってる仕事において、その仕事はその仕事なりに、その仕事において、俺はこの仕事で世界への挑戦に立ったるんやと。そして、やがては、全人類がそのような仕事をしてる人間は、全部、俺を目標に努力するんや。そういう人間になったろうというね、そういうふうな気持ちで、これからわれわれは目標を定めなければならない。この理性的な内容として、人を感動させることができるものは、その３つです。知識の量と、なんでそんなことまで知っとるんやってね、あの、『クイズ王決定戦』というのは昔あったんですよね。全国の地方予選を勝ち抜いてきて、最終的にチャンピオン大会に出るんですけども、そのチャンピオン大会に出てくるような、そういうこのクイズ王というのは、もう本当にもうとんでもないことまで知っとってですね、本当にこう、その質問に対して、互いにわかった人間がポンとボタンを押して答えるんですけど、もう聞いとると、本当にもう感動ものなんですよね。最近はあんまりそんな番組やってませんから、見られたか、見られてないか知りませんけども、僕ら、もうちょっと若いころですね、10年ぐらい前か、それぐらいのころには、『クイズ王決定戦』というのは盛んにやってましたね。**

**次、２番目の人格の内容は、感性的魅力というね、感性というものの中に含まれておる人格の内容ですね。これは、感性というのは理屈を超えた世界ですから、理屈を超えたこの人格の内容として、人間を感動させるもの。これは意志の力と、愛の力と、人間性というね、この３つであります。意志の力というのは、人間が感動する意志の力というのは、不撓不屈の意志ですね。どんな困難でも乗り越えていくぜという、そういうこう、不撓不屈の意志を見せられると、感動するわけですね。また、愛の力。これは深い愛に感動する。人間は深い愛に感動する。愛は理屈を超える力ですからね。理屈を超えた愛に人間は感動するわけですね。デートでもですね、ちゃんと約束したんやから、その時間に来るのは当たり前なんだけども、よく女の子は、男の子の愛を確かめるためにわざと遅れて来たりするんですね。その、どの程度、自分のことを好きなのかね、それをどれぐらい待てるかによって決めてしまうんですね。わざと１時間ぐらい遅れて来たりしてね。１時間ぐらいで帰ってしまっとったら、もうあいつは脈ないわでね、もうその程度にしか、自分のこと、好きやなかったんやって判断してしまう。そやけど、２時間でも、３時間でも、待っとってね、もう６時間も待っとって、もう帰ったやろうなと思って行ったら、まだ突っ立っとったと思ったらね、そんなに私のことを好きだったのと思ってしまってね、結婚することになってしまったりするような、そういうこともあるわけですね。それは理屈を超える愛の確かめ方なんですね。**

**また寒い冬にね、こんなに寒い冬に、その女の子が、海が見たいなというようなことを言うもんですからね、車に乗せて、海岸に行って、海を見せてあげようと思って、海に連れていったところ、もう突然ですね、本当に私が好きなんやったら、この海に飛び込んでごらんなんていうようなことを言われてですね、こんなばかなことを言うような女はもう付き合えんといって、そこで別れてしまったら、それまでの話なんですけども、飛び込んだろうやないかっちゅうて、飛び込んでですね、それで、そんなに私のこと、好きやったのってなってしまって、結婚できたりね。愛というのは、そういう理屈を超えるものを示さないと、愛の実証にならないんですね。愛は理屈を超える力だ。だから、現実的にはね、その考え方が違ったら、好きになれんっていうのが、理性的な人間の愛の状態ですけどね。だけど、本当の愛というのは、この考え方が違う人とどうしたら共に仲よく生きていくことができるかという、そういうところから出てくるのが真実の愛でね。自分と同じ考え方の人間しか愛せないというような人間は、原理的には自分しか愛せない人間なんだから、そんな愛は偽物の愛だ。自分と同じ考え方しか愛せないような愛は、それは本来、自分しか愛せないような愛なんだ。偽物の愛だ。愛は他者を愛するために存在するんだ。愛は理屈を超える力なんだ。だから、本当の愛というのは、自分と違った性格や、自分と違った考え方や、自分と違った宗教や、自分と違った感じ方の人と共に仲よく生きていく力が、真実の愛というんですね。**

**だけど、ほとんどの人たちは、その真実の愛を見失ってしまっておる。今の人間、みんな理性の奴隷だからですね、みんな理性の奴隷だから、自分と同じ考え方の人しか愛せない。自分と同じ宗教の人しか愛せない。自分と同じ立場の人しか愛せない。だから、戦争になるんだ。だから、夫婦は別れなきゃならん。だから、親が子どもを殺すんだ。自分の言うことを聞かんと、子どもでも憎たらしいんですね。むかつくんですね。だけども、命は親子に愛をつくってくれた。夫婦に愛をつくってくれた。なんで夫婦に愛をつくってくれたのか。なんで夫婦には愛が必要なのか。なんで親子には愛が必要なのか。どうして命は愛をつくったのか。それは、理屈では生きられないからだ。理性では社会を崩壊させるからだ。だから、社会を生きる原理として、命は愛をつくってくれたんだ。親子にどうして愛が生まれてくるのか。それは子どもというのは、常に新しい時代をつくるために生まれてくるんだ。いつまでも、お父さん、お母さんの言うことを聞いとったらいかんのだ。いつまでも大人の言うことを聞いとったらいかんのだ。お父さんやお母さんや、大人よりもっと素晴らしい、もっと新しい考え方や、価値観や、欲求を持って、そして、今までにない新しい時代をつくっていく。それが、生まれ出てくる子どもたちの、この使命、人間、生まれてくるっちゅうことの理由、意味なんですね。**

**人間みんな、新しい時代をつくるために生まれてきたんだ。私も、諸君も、みんなそうなんですよ。新しい時代をつくるために生まれてきたんだ。歴史をつくらなければならないんだ。だから、過去を乗り越えなければならないんだ。今までの人と同じようなことを考え、同じような欲求しか持ってなかったならば、保守的になってしまう。歴史はつくれない。人間も会社も歴史をつくるために存在するんだ。歴史のつくれないような会社は存在価値がない。会社というのは、常に未来からの要請に応え続けなければ存続できないんだ。会社の発展の理由は、会社の発展の原理は、消費者の要望に的確に応えていくっちゅうことですね。そして、会社が存続する理由は、存続の原理は、未来からの要請、歴史の要請に応え続けること。それ以外に会社の存続の原理はない。常に会社も人間も、歴史をつくらなければ生存価値がないんだ。人間が生まれてくるのは、常に新しい時代をつくるためだ。会社をつくるのも人間ですからね、会社も同じだ。会社もやっぱり、新しい時代をつくるために存在するんだ。今までになかった建築をつくる。それが建築会社において、歴史をつくる仕事だ。今までと同じような建物しかつくれないような会社は、必ず飽きられてしまう。新鮮味のある、感動のある、新しい価値を表現する建築をつくらなければ、時代において生き残れないんだ。**

**とにかく子どもというのはですね、常に新しい時代をつくるために生まれてくる。だから、親とは違う新しい考え方を持たなければならないんだ。そして、自分の子どもが親と違った考え方を持ったら、親はその子どもを褒めてあげなければならない。おまえ、そんなことを考えてんのかと。おまえ、そんなことを考えることができるようになったのか。すごいやないかと褒めてあげなければならない。違う考え方を認めて、許して、褒めなければならない。だから、親には理屈を超える、理屈を超えた愛が必要なんだ。それが深い愛ということですね。愛があったならば、理屈を超えられる。理屈を超えて人間を愛するということがね、できるわけです。それが真実の愛だ。自分と同じ考え方しか、自分と同じ考え方の人間しか愛せないような愛は、偽物の愛だ。自分と同じ考え方の人しか愛せなかったら、愛なんかいらん。理性で十分だ。だけども、社会というものは、自分とは違う性格の人、自分と違う考え方や立場の人や、自分とは違う宗教の人や、自分とは違う商業の人と共に仲よく生きていかなければならんのが社会だ。**

**だから、社会は理屈では生きられない。だから、理屈を超える力が必要だ。だから、命は社会を生きるために人間に愛をつくってくれたんだ。愛とは、そんな恋愛沙汰の甘っちょろいもんじゃない。愛は厳しい努力だ。本当に人間を愛するということは、血のにじみ出るようなですね、厳しい努力が要求されるものだ。そこに愛の感動が生まれてくる。愛があるかどうかはなんで決まるのか。それは相手のために自己犠牲的な努力ができるかどうかだ。相手のために自己犠牲的な努力ができなくなったら、そこに愛はない。相手のために自己犠牲的な努力ができるということが、愛がある証明だ。愛は努力だ。自分のことよりも相手のことを優先する。それが愛のですね、心情だ。自分本位で、自己中心の人間には、本当に他人を愛する愛なんていうのは存在しない。そういう相手のために自己犠牲的な努力をする。その愛に人間は感動するわけです。それが愛のドラマですからね。**

**感性的魅力の３つ目は人間性ですね。人間性というのは、これは性格と人格の絡み合いでできておると。人間性というのは、性格という格と人格という格の絡み合いで人間性はできておる。性格と人格はどう違うのかといったら、性格というのは、これは自分でつくっていくもんじゃなくって、自然にできてきてしまうもんですね。だから、こんな性格になろうと思ってなった人間は誰もいない。気が付いたらこんな性格になっちゃってたんですね。自分で意識的になるもんじゃなくって、自然にそういう性格に、この、いつの間にかなってしまうというね、それが性格なんだ。具体的には、性格の50％は遺伝なんですね、これは。もう生得的に決まってしまっておる。単細胞生物から人間にまで進化するまでの間に積み重ねられてきたものが、その人間の性格の50％を決定する。あとの50％は、生まれてからのちに自分が気が付かない間に自分の中に積み重ねられていったものが性格として表現される。この自分が生まれてからのちにですね、自分が気が付かない間だに自分の中に積み重ねられていったものが、性格として出てくるんですけども、それは自分が意識しない間に自分の命にこう積み重ねられていったものが、精神的な領域で出てくると性格になるんです。だけど、それは肉体的な領域で出てくると、この手相とかね、顔の相とか、へその相とかね、足の裏の相とか、相になるわけなんですよ。肉体の、肉体的に出てきたものが相であって、精神的に出てきたものは性格なんですね。**

**だから、手相も自分では変えられません。だけど、毎年毎年、少しずつ変わるんですよ。だから、同じ易者さんにですね、毎年１回、系統的にちゃんと見てもらっておったら、もうその人の運命は完全にわかってしまいます。あなたはこうなりますよ。そうなっちゃう、必ず。命もやっぱり、自動車と同じで、急には止まれない。惰性がありますからね。とにかく、この性格というのは、そういうこう、自分が意識しない間に、このつくられていってしまうもんですね。50％は遺伝ですから、だから、占星術とかね、易学だったり、そういうこの四柱生命みたいなもんで、50％は性格も完全にわかってしまいます。だけど、あとの50％は、はっきりとは決まらん、不安定な部分だ。だから、結果としては、当たるも八卦、当たらぬも八卦なんていうことをいいよるんですけども、本当はちゃんと八卦は当たるようになってるんですけどね。だけど、当たらない部分があるのは、それは後天的に変化する部分があるからです。**

**とにかく性格というのは、そういうふうにこう、自分の力ではいかんともし難い。気が付いたときには、こういう性格になっちゃってたもんでね、なっちゃうものは、もうなっちゃうんですから。これは、なっちゃんはね、放っておくよりしょうがないと思うんですね。だから、人格というのは、これは後天的に人間が努力してつくっていくもんです。人格を持って生まれてくる人間は誰もいない。生まれたときは、おぎゃあと生まれたときは、動物学上の分類における人類だ。動物として生まれてくる。そして、生まれてからのちに、人間の社会の中で育てられ、また自らも努力をして、人間は人間の格を獲得して、人間になるというね。そういう存在であって、人格は自らの努力によって獲得するものだ。だから、人間性を成長させようと思ったならば、われわれは性格はどうにもならんからですね、人格を磨くしかないという、そういう原理になってくるわけですね。**

**だけども、この性格というのはですね、全然なんともならんのかといったら、そういうわけではない。性格というのは、これは自然にできてくるもんですから、必ず性格には、マイナス面とプラス面があるんですね。だから、人格を磨くと、性格の持ってるマイナス面があんまり出てこないようになってきて、性格が持ってるプラス面が、だんだんよく出てくるようになってきて、その結果として、人間性がよくなったように見えるんですね。見えるっちゅうより、実際よくなるわけなんですけども、性格そのまんまではね、性格には必ずプラス面とマイナス面があります。これは、宇宙そのものの原理がね、その宇宙そのものがプラスエネルギーとマイナスエネルギーのバランスの模索という力で、宇宙は維持されてるわけですから、宇宙そのものもマイナスとプラスのバランスで成り立ってるんですから、あらゆるものが対という構造なんですよね。だから、性格にもマイナス面とプラス面があります。もうそのままでは自然であってね、文化ではない。人間は文化をつくる動物ですから、だから、性格を自然のままで放っておいたら、それは動物の段階だ。だから、人格を磨くことによって、性格の持ってるマイナス面があんまり出てこないようにする。そして、性格が持ってるプラス面が強調されるようにする。それが人間文化をつくるということによって、自分を成長させる原理ですね。**

**性格を文化たらしめる。そのためにわれわれは、人格的努力をしなければならない。すると、人間性は成長する。そういう構造になってます。だから、人間性を成長させようと思ったら、原理的には人格を磨かないかんということになるわけですね。人格を磨くとはいったいどういうことなのかといったら、人格には高さ、深さ、大きさって、３つの要因がある。人格を磨こうと思ったら、人格の高さを求め、人格の深さを求め、人格の大きさを求めていくという、そういうことを意識的に努力しないと、人格は成長しません。そのことを知らなければね、どんだけ人格を磨こうと思っても、永遠に人格は成長しません。能力は成長しますけど、人格は成長しません。とにかくこの、感性的魅力ということの中にはですね、この不撓不屈の意志と、深い愛と、そして、この人間性という、この３つの魅力がですね、存在するわけであります。**

**次は肉体的魅力ですね。肉体的魅力というものにも３つの内容があってですね、肉体的魅力の第１番目、これはもう肉体的魅力といえば、あのことやなというね、そういうことで、誰でもぱっとこう、頭に思い浮かべるような、そういうプロポーションだとかね、顔がきれいとかね、そういうこう、表面的な魅力がありますよね。これもやっぱり、人間は肉体を持ってますから、誰でも美しくなるべきである。みんなね、人間というのは、その顔はその顔なりの最高の美しさというのがあるんですよ。顔は変えられませんけどね、だけど、その顔を美しくすることは誰にでもできるんですよ。美しくする原理は緊張感ですね。だらっとしたらね、どんな美人でもね、駄目になります。だけど、緊張感というね、こう張り詰めた、だけど、緊張し過ぎちゃっちゃ、ストレスになりますけどね、何かしらこう、真剣に何かをやってるって、真剣さというね、真剣さというこの緊張感がね、肉体を引き締めてね、その顔はその顔なりの最高の美しさというのを表現するんですよ。**

**だから、アイドルの人でもね、ひょっとして、ぽっと出てきたときは、そう大した魅力なかったのにですね、芸能人として忙しく仕事をしてる間に、だんだん、だんだん、顔がこう、きれいになってくる。顔に輝きが出てきて、さすがにそのアイドル、スターやなという感じにこう、なってくるんですよね。あれは、命がある、張り詰めたね、状態になって、緊張感を持ってくるから、その命の秩序がね、しっかりしまして、そして、この美しさというのが出てくるんですね。だから、だらっとしたような生活をしておったら、美しくなれません。やっぱり、それなりに張り詰めたですね、その緊張感のある、そういうこの、仕事の仕方、生活の仕方というのをやってると、だんだん、だんだん、その顔はその顔なりの最高の美しさになります。**

**体重でもね、あの、女の人はもう本当に痩せたい、痩せたいって、痩せとったらもう、美しいかっちゅうような、そんな感じで本当にもう痩せることばっかり考えとったりするんですけども、感性というのは、ちゃんとそういう、この肉体の形態もね、自然治癒力という範囲があってね、ある程度の健康な肉体のそういうあり方というのを知ってるんですよね。というのは、血圧にもね、最高血圧、最低血圧がある。あと、脈拍数にも、ある程度、範囲がある。また、その血糖値にも範囲がある。人間の体の健康状態というのは、ある範囲で保たれてるんですよね。その間でこう、調整しながらね。それが、結局のところ、その結局、薬局、郵便局でね、自然治癒力というふうに呼ばれてるものなんですよ。自然治癒力というのは、ある範囲で働いておって、それを越えたら病気なんですけども、その範囲内で調整してるというのは、それが自然治癒力なんですね。ちゃんとそれを感性自身が知ってる。そういうこの範囲があるんですよ。**

**だから、健康にさえ生きておったならばね、自然に体重調整もね、ちゃんとしてくれるようになってるんですよね。無理に痩せたいとか、無理に太りたいとかというようなことを考えなくても、ちゃんといい健康状態に体重を保つようになっててですね、その感性の声さえ聞いておったならば、だんだん太ってきたら、もうこれ以上、太ったらいかんっちゅうんでね、だんだんと食べないというかですね、自然に食べられないようになってきたりね。でも、ある程度、食べると、もうちょっと無理やっちゅうことになったりして、ちゃんと感性の声を聞いておったら、体重の維持ができるんですよね。僕でも、ちょっと肥え過ぎてるんですけどね、肥え過ぎてるんですけど、一番、もうちょっとで危険やっていう手前で止まってるんですよね。だいたい、いつ測っても76キロなんですよ。本当は、標準値からいったら、あと10キロ減らさんないかんっちゅうんで、66キロぐらいが標準体重やっていわれてるんですけど、その前後５～６キロは、だいたいその許容範囲なんですよね。だから、本当は76キロはちょっと多過ぎるんですけど、だけど、いつ測っても、76キロよりは上がらないの。どんだけ食べてもね、76キロより上がらないんですよね。ちゃんとそれなりにね、調整してもらってるような感じでね、それ以上、太らない。限度一杯でようやく踏みとどまってるような感じなんですね。ちょっと話がずれましたけど、とにかくは、人間は肉体を持ってますからね、だから、容姿という、そういうこのことについてもですね、気を遣うことは非常にこれは人間という魅力の大事な部分です。**

**それから、２番目のこの肉体的魅力はですね、これは目の魅力、目つき、表情、態度の魅力ですね。目に魅力がある。表情に魅力がある。態度に魅力がある。そういう魅力もやっぱり重要なですね、ものであって、それが人を感動させることが非常にあるわけですね。日本の武士がね、昔、江戸初期だとか、あるいは、明治の初めにね、ヨーロッパに行ったときに、あまりにもじゃないわ、非常にこのすきっとしたですね、腰を立てて、ちゃんと座るしですね、あまりにも立派な、その節度のある、そういうこの態度に、ヨーロッパ人がものすごい感動したんですね。ああいうこう、姿形というのがですね、態度のこのすがすがしさにね、感動させるという、そういうものもあるんですよね。目に感動がある。表情に感動がある。目の魅力、表情の魅力、態度の魅力。これもやっぱり、人と接するようなね、そういうこの仕事をしておったならば、その魅力をつくることはものすごく大事なことで、それだけでも商売になることもありますからね。もう、セールスマンでも、あまりにも態度の立派さにほれ込んでしまって、もうその人の持ってくるもんやったら、なんでも買うたるっちゅうような感じになるようなことがあったりしますからね。それだけの魅力が、やっぱり、肉体にはあるんですよね。目の魅力、表情の魅力、態度の魅力。**

**３番目の肉体的魅力は立ち居振る舞いですね。立ち居振る舞いの魅力。行動の美学ですね。行動の美学。この、バタ臭いね、その歩き方とかね、いかにも田舎者という感じのこの動き方があったりしますが、それが洗練されてくると、またものすごいきれいなんですよね。決して、ファッションモデルみたいなきれいさとも全然違って、生活の中の美学なんですよね。これは日本にも昔から行儀作法というのはあってね、昔は障子開けるんでも、いちいち座ったりしてね。片手で開けるんじゃない。両手で開けたりしてね。それがこう、そこはかとない美しさを感じさせるようなムードがあったんですね。最近はこんな面倒くさい、こんな非合理なね、そんな能率の悪いことやっとったら、もう仕事できんというので、足で蹴っ飛ばして開けてしまったりね。もう全然、美学がなくなってしまいましたけども、でも、そういうこの立ち居振る舞いの美学というものも、やはり生活の中には、余裕、ゆとり、潤いとしてね、考えなきゃならん。能率ばっかじゃ、人間じゃないと。そういうこの無駄な部分がね、いかに美を感じさせるかということも考えなきゃならん。**

**これは建築にもそうなんですよ。もう合理性一辺倒でできた建築には、美はないですからね。何かしらちょっと無駄という、その無駄の部分が、そこはかとない、雰囲気を漂わせるわけですよね。べつにこれはここになきゃいかんわけじゃないけども、これをここに置いたら、なんとなくその部屋のムードが温かいとかね。ゆったりするとかね。気分がいいとかっちゅうことがありますからね。無駄の効用というのはあるわけですね。全然無駄がなかったら、命は死んでしまう。光には影がいるんだ。表には裏があるんだ。そういうこの一見、無駄の部分が、実はその反対のものを生かしてるんですね。悪がなかったら、人間は善を求めない。そういう無駄の効用ということもね、建築哲学では非常に重要な部分です。建築というのは、これは柱を立てるんですけどね。実際に建築がつくってるのは、その柱じゃない。空間なんだ。建築は空間芸術なんだ。その部屋をどういうふうな雰囲気の、どういうふうなかたちのね、空間にするか。その空間に価値があるのでね、外に価値があるんじゃないんですね。空間がその人間の住むところですから、柱の中には住めないですからね、これは堅くて。人間が動き回るのは、この空間の部分ですからね。空間をつくるのが建築なんだ。空間にかたちを与える。空間を限定して、空間にかたちを与えて、空間に意味を与え、それが建築思想ですね。とにかく、この行動の美学というのはね、人間には必要です。**

**皆さん方も、外国からやってくるアーティストの方がね、黒人の歌手とかはね、ちょっとした動きの中にぞくっとするような魅力があるんですよね。なんでもないことなんですが、ちょっと手をこう上げてね、それを何か音楽に合わせてひらっと、ちょっとぱっとこう動かしたら、ぞくっときたりするんですよね。足でもね、日本人が足、少々振ったって、何やっとんやっちゅうような感じですけどね、だけど、その外国から来た芸能人が、その歌いながら、足をひゅっと、ちょっとこう、15度ぐらい、ひょっと横に動かすだけで、ぞくっときたりするのね。ああいうのは、いわゆる、行動の美学というか、動きの中にそういう、この感動があるというね。そういうことも、やっぱりね、人間にとって、ものすごく大事なこれは部分で、そういうことをあんまり日本人は考えませんけどね、だけど、やっぱり、外国人はそういうね、この感性というのをこう、磨いてるんですね。だから、非常にこの外国映画見ると、その外国人の映画スターのやることというのは、かっこよ過ぎるぐらい、かっこいいですからね。なんでこんな場面で、こんなかっこいいことを言えるのとかね。かっこいい行動を取ったりね、非常に感動させるんですよね。それはやっぱり、肉体の持ってる魅力というものもね、もっともっと追求する必要がある。人間の生き方を高度にしようと思ったらね、そういうところまで、やっぱり、われわれは気を遣いながらね、やっていったら、商売も繁盛しますよ、これは。**

**接する人間にそういう感動を与えればですね、ものすごく魅力を感じさせて、同じ注文するんやったら、あいつやなくて、この人にというね、そういうことで、その一人のセールスマンに注文が集中するみたいなことだってあるんですからね。なんであいつ、そんな人気あるんやろうとか思うんですけどね。むしろ、頭がそんなにいいわけやないしなと。どこが気に入ってもらってるんやろうと思うと、その表情に魅力があったりね、行動のタイプが面白いとかね。いろいろそういうこの、合理的にはわからないようなところに人間の魅力というのはあったりしますからね。とにかくこの人格というのをね、この形成する人間、本物性を追求するという、この人格の３つの条件というものをわれわれが追求していく努力をするならば、結果として、今、申し上げたようなですね、人格的魅力というのが出てくるわけですね。**

**その次、人間力というのがありますが、人間力というのは、これまたちょっと、この違った分析の仕方から出てくるですね、この人格の内容ですけども、人間力もやっぱり、この人格の３条件という、人間が、本物の人間を目指すという努力をすることによって、その出てくるですね、この人間しか持ってない魅力というのが人間力です。人間力には内的人間力と外的人間力がある。内的人間力というのは、人間が内面において持っておる力ということですけども、これはいったいなんなのかといったら、人間は理性、感性、肉体という、３つの要素からできてますから、人間には理性に対応する知力、感性に対応する気力、それから、肉体に対応する体力。そういう力があるわけですね。それから、あと、意志の力、愛の力。この５項目が、人間において内的人間力というふうにいわれるものです。**

**外的人間力とはなんなのかといったら、人間が外の世界、社会に対して表現してきた人間の力というのがね、これが外的人間力です。人類が長い歴史の中で、人類というものが持っておる能力を外の世界、社会に対して表現してきて、そして、結果として出てきたものが外的人間力です。外的人間力にも５項目の内容があります。それはなんなのかといったら、政治力、経済力、教育力、文化力、軍事力。人間が社会の中でこの立派になっていこうと思ったら、人間が社会の中で、たくましいね、この活動というか、社会の中で人間らしい立派な生き方を貫いていこうと思ったら、どんな仕事をする場合でも、人間には、政治力と経済力と教育力と文化力と軍事力という、この５つの能力が必然的に要求されます。軍事力というのは、べつに軍隊を持たないかんちゅうんじゃなくって、社会において軍事力とは、もう危機対応能力ですね。危機管理の能力、危機対応能力。会社でいえば、リスク管理とかね、そういう問題があったときに、それにどう対応するかという、そういうことに対する能力というのは必ず要求される。敵から身を守るようなね、そういうこの力。**

**よく株式会社には、総会屋さんに、牛耳られるということがあったりしますけど、そういうものに対してどう対応するかということも、これは大事なんですね。会社の中にもどんな人間でも必要なのでね、一見、やくざと思われるような人間もね、おったら助かるんですね。そういうこう、やくざみたいな人がやってきたときにね、それを上回るやくざっぽいやつが会社におったりしてね、撃退してくれたりね。**

**昔、森繁久彌さんがやっておった『社長漫遊記』というのがあるんですけどね。『社長漫遊記』という映画があって、ずっとシリーズで何十本もあるような、そういうシリーズですけども、その『社長漫遊記』の森繁社長の会社にはね、宴会専門部長がおるんですよ。宴会専門部長って、宴会になったら、もうこの人に任せとけっていうんでですね、そういうこの宴会専門部長で、それを三木のり平さんがやってるんですね。外国との取引で、外国から重要なお客さんがやってくるとですね、そうすると、その三木のり平さんの出番で、そのいろんな料亭に案内したりですね、いろんな女性、紹介したり、いろんなことをして、その交渉がうまく成り立つようにもてなすんですよね。それ、宴会部長でも、宴会といったらもう、ほかの仕事はなんにもせえへんのですけど、宴会となったら任せておいてという、そういう感じの人がおってですね、もう風俗から、全部知ってるんですよね。その相手のお客さんが要望することを全部かなえてあげたりして。そのほかに注文を持っていかさないで、自分のところでその契約を取ってしまうというような、そういうことも会社には必要なんですよね。そういう人もね。もういろんなタイプの人が会社に必要なんですよ。社会が相手ですからね。全然仕事ができんでもね、『釣りバカ日誌』のハマちゃんみたいなのも会社に必要ですしね。無駄の効用と申しましょうかね。べつに無駄じゃないんですけども、そういう人もおって会社なんですね。なんかの役に立つかもしらんっちゅうて置いとくわけですよ。実際問題、その森繁久彌さんの『社長漫遊記』では、三木のり平さんなんちゅうのは、もう全然、宴会だけですからね、全然仕事をしませんからね。だけど、そういうこのお客さんがやってきたときに活躍するわけですね。**

**ちょっと話がまたそれちゃいましたけども、とにかくはですね、この人間力には外的人間力というのがあってね、家庭を守るためだったらね、やっぱり政治力は必要なんですよ。隣近所や、そういう地域の中でですね、自分の家庭というものをちゃんと守っていって、その存在価値を他人に認めさせるようなね、そういう政治力がなかったら、やっぱり、家族が、やっぱり肩身の狭い思いをしますからね。決して政治力はべつに、男に必要なだけじゃなく、女にも必要なの。政治力なかったら、社会の中で自分の存在価値というものを他人に認めさせることできませんからね。だから、政治力も必要だ、経済力も必要だ。教育力も、教育力というのは影響力ですよね。べつに子どもを育てるだけが教育じゃないんだ。いろんな意味で人を教えることができる力というね、そういう教育力を持つことが、やっぱり、社会の中で生き抜いていこうと思ったら、非常に大事である。人を納得させる力、説得力、納得させる力、いろんなことがね、そういうもので要求されてきます。政治力、経済力、教育力、文化力。**

**文化力というのは、教養の高さですね。教養というのは、なんとなく人間、信頼感とかね、親しみとかというものをこう、つくるもんですよ。あの人は仕事もできるけれどもね、絵を描かせてもなかなかのもんで、ギターを弾かせてもなかなかなもんで、小説を書いても素晴らしいとかね。詩を書いたら本当にしびれるような詩を書くとかね。そういう文化的な魅力を持っておると、すごく親しみを感じられますしね、尊敬とか、信頼とか、信服とかね。そういうものを獲得できるんですね。そういう意味で、そういうこの文化力というのは、非常にこれ、人間的な要素で大事なもんです。軍事力ですね。危機対応能力、危機管理能力、リスク管理。そういうこの外的人間力というのは、これはなんなのかといったら、それは内的人間力というものが、総合的に、統合的に、有機的に働いた結果としてですね、それが外の世界の事柄に対して表現されたときに、そういう政治力が出てくるし、経済力が出てくるしって、だから、経済、政治力を磨こうと思ったら、知力、気力、体力、意志の力、愛の力というのを磨かないと、政治力は成長しないんですね。経済力も同様。経済力一つだって、知力、気力、体力、意志の力、愛の力というのは必要なんですよ。**

**経済力ってなんだと、経済力というのは、金があるぜっちゅうことじゃないんですね。経済力があるかないかというのは、金があるかどうかじゃないんだ。経済力というのは、現実の社会に存在する経済システムを熟知しておって、その経済システムを使いこなす力が経済力なんですよ。経済力。本当の経済力は、経済システムを熟知しておって、経済システムを支配して、使いこなしてからが経済力なの。だから、株が上がらんともうからんというような、そんな半端なもんじゃ、それは経済力はないんだ。株はヘッジ機能ですからね、上がっても下がっても、もうかるようになってますので、上がってももうけて、下がってももうける力をつくっていかないと、本当の経済力はないんだ。デフレだからもうからんって、それは半端な経済力ですね。デフレはデフレのもうけ方がある。インフレはインフレのもうけ方がある。それぞれもうかる。それが経済力だ。それが人間力としての経済力なんだ。**

**経済って、人間がつくったもんですからね。人間がそれを支配しなければ、価値がない。とにかくこの人間力というものには、内的人間力と外的人間力があってですね、外的人間力というのは、内的人間力が有機的、統合的に働いて、社会の中でいろいろと、この表現されていく。結果として、何が出てくるかというと、政治力と、経済力と、教育力と、文化力と、軍事力という、そういうかたちのものがね、現実に、この存在するのである。これは人間が生きていくためには、両方、内的人間力も外的人間力もですね、必ずこれは、なにがしか持っていなければですね、この一人前の人間として、独立した一個の、自立した人間として、社会を自信を持って生きていくことはできない。そういうこの内容の、そういう要素になってくるわけですね。とにかくこの人格の３条件というね、この不完全性の自覚からにじみ出る謙虚さ、それから、人間としての成長意欲、それから、人の役に立つことを喜びとする感性という、この本物の人間の条件を追求するという、この本物の生き方をしておったならば、今、申し上げた、そういう人格の内容、人間的魅力というものがですね、備わってくるわけであります。**

**さらにですね、その人格を、その人格の内容をさらに成長させていこう、人格を磨くということをね、考えるならば、どうするかというのが、次のテーマで、この政治力を高め、経済力を高め、教育力を高め、そして、その文化力を高め、軍事力を高めていく。そういうこの人格の内容をさらに成長させようと思ったならば、次は人格とはなんなのかということをね、考えなければならない。すなわち、人格の３条件と、これは不完全性の自覚からにじみ出る謙虚さ、人間としての成長意欲、人の役に立つことを喜びする感性、この３つは、人間に、人間の格をつくる条件ですから、その３つのことを追求した結果、この人間の格ができてくるんですね。じゃあ、そのできてくる人格とはなんなのかということを考えなければならない。人格というのはですね、これはどういうもんかということですけども、結果として出てくる人格というものは、これは簡単にいってしまえば、人格とは意識の内容である。その人物が、この１日の大半をどういう意識に基づいて生きておるか、生活をしてるか、仕事をしてるかによって、その人間の人格は決まる。金のことばっかり意識してる人間はそういう人格だ。正しいか、間違ってるかということばっかり言ってる人間はそういう人格だ。善か悪かということばっかり言ってる人間はそういう人格だ。その人間がどういう価値観、どういう意識に基づいて、１日の大半のいろんな判断をし、いろんな行動をしてるかによって、その人間の人格は決定される。**

**人格とは意識の内容である。その意識というものは、これは言葉によって表現されるんですね。意識は言葉によって表現される。言葉によって表現されなければ、その意識はあってなきがごとし。言葉によって表現されなければ、その意識は表現されないし、自覚されない。意識は言葉によって表現される。言葉は３次元である。一人称、二人称、三人称しかない。人類の持ってる言語は、どの民族の言語も三人称までであって、四人称はない。なんでいったい言語は三人称なのか。なんで言語は３次元なのか。それは意識というものは、その命が存在する外の世界ですね。外の空間。意識というのは、空間を写し取るという働きをするんですね。意識は空間の構造を写し取るという働きをします。すなわち、知識を追求するというのは、空間の中のいろんなものを知るという働きですね。また空間の構造とかね。法則とか、構造とか、あるいは、あそこに何があるとか。結局、意識は空間の構造を写し取るんだ。空間は３次元だ。だから、この空間の構造を写し取るという働きによって、意識が形成する。意識の空間という、内的空間も、やっぱり、３次元という構造にならざるを得ない。意識は３次元という構造を持たざるを得ないから、だから、意識を表現する言語も３次元なんだと。だから、人類の言語は、一人称、二人称、三人称という人称以上のものはない。三人称まで。３次元という構造しか言語は持ち得ない。そういうこの理由があるわけですね。そして、人格はその意識の内容だから、だから、結果として、人格もやっぱり、意識の内容であるから、意識は３次元なんだから、人格も３次元という構造を持たなければならない。そういうこの理由が出てきまして、人格は３次元だというね、そういうふうに考える必要性ができてくるわけであります。そこでどういうふうに、その人格というものを３次元の構造を元に戻して、まとめればよいのかということを次に考えなきゃならんのですけども、とにかく３次元の構造でまとめあげればね、どういう表現を使ってもよさそうなものなんですけども、だけども、このなんでそういう構造を、どういう、なんでそういう表現をするのかという根拠としてね、その人類が長い間にですね、これまでの3,000年間の歴史において、人類は人格というものをどのように表現してきたかという、その事実をですね、たどっていくと、だいたい人格というものは、３次元という構造で表現するならば、どういうものになるかということがだいたい決まってくるわけですね。だいたいこれまで、人間がですね、人格というものをどういうふうに表現してきたかといったら、あの人はなかなか人格が高いなとかね、なかなか深いことを言うなとかね、高潔なる人物だとかね、あるいは、高尚な趣味とかね。それから、度量が大きいとかね。心が広いとかね。いろんなことを人間を褒める言葉として言ってきたんですね。それをずっとまとめていって、そして、この３次元という構造にすると、どうなるかといったらね、結果として、人格には高さ、深さ、大きさという３つの次元があるというふうに言うことが最も自然で妥当、ふさわしいという、そういう結論が出るわけであります。**

**そこでですね、われわれは、人格を磨こうと、さらに自分の人格を成長させよう。すなわち政治力を高め、経済力を高め、教育力を高め、文化力を高め、軍事力を高めていく。また、理性的魅力、感性的魅力、肉体的魅力を成長させていこうと思ったならば、われわれ、どういうこの努力をせんと、セントバーナードなのかね、ということを、考えないといかんと。そこで、その人格は３次元だということをちゃんと知ってですね、そして、人格を磨いていこうと思ったならば、どうするかといったら、人格には高さ、深さ、大きさという、３つの次元があるんだからね、だから、人格の内容をそれぞれに成長させていくためには、われわれは人格には高さがあるんだから、いったい人間はどこまで自分を高めることができるんだろうかという、そういう問いを持ってですね、生きて、生活、仕事をしなきゃならん。また、人格には深さという構造があるんだから、だから、いったい人間はどこまで深くなれるんだろうという、深さを追求するという意識で、その仕事をし、生活しなきゃならん。また、人格には、この大さとか、それから、広さとかね、そういう次元があるんだから、だから、われわれは、いったい人間はどこまでその心を、度量を、広く、大きくできるだろうか。そういうこの問いを持ってですね、本を読み、仕事をし、生活をするということをする必要がある。そうすればですね、この人間のこの人間性、人格、さらにこの素晴らしいものとしてですね、成長していって、そして、人類の人間性は進化することになるんだ。そういうふうにこの、言わなければならない。**

**今、われわれ日本人はね、世界から尊敬され、信頼される人間性というものをつくっていかなければならない段階にこれから入るんです。これまでは、アメリカ人が人間性においても尊敬されてました。アメリカ人みたいな人間になりたい。アメリカみたいな国になりたい。アメリカは全世界の目標だったんですね。あらゆる意味で。だけども、そのアメリカが今、信頼を失墜してですね、そして、衰退、衰弱の状況に入ってしまっておると。いわゆる老体国家への道を歩み始めておる。次に、この人類の目標となり、また人類から尊敬され、信頼される民族と国家は日本しかない。中国やインドは、まだまだこれからのですね、国家であり、民族だ。現在の中国人やインド人では、どうしても尊敬はされない。また世界の目標とはなり難い。ヨーロッパ人、ヨーロッパの諸国は、もうすでに歴史的役割を終えてしまった諸国だ。これからアジアの時代なんだ。だけど、まだアジアの中で日本しか世界に理想を与え、世界に希望を与え、世界から尊敬されるような文化的内容を持ってる国は、日本しかないんだ。日本の伝統文化の中には、すべての外国人を感動させるものがある。**

**もうすでに日本人は、さまざまな領域で、世界一という分野をどんどん築きつつある。時計も、カメラも、家電も、自動車も、いろんなものがね、もうすでに世界一なんだ。これからもっともっと、あらゆる職業分野においてね、日本の職業人は、世界の挑戦を極める努力をしていく必要がある。そのことによって、やがて日本は全世界の目標となる。全世界が日本に憧れる。ようやく昔、日本が黄金の国ジパングといわれた、それがかたちになる時代がようやくやってきたんですね。全世界が黄金の国ジパング。あの素晴らしい日本を見てから死にたい。そんなことを言われるようなね、そういうふうな状況になってくるわけです。なってくるったって、放っておいてなってくるわけやないですからね。なるように努力したらなる。努力したら、できるんだ。だからせんないかんということなんですね。**

**とにかくこの建築のね、世界でいったならば、日本のこれまでの大手のね、ゼネコンといわれる大きな建築会社は、もうすでに社会から信頼され、尊敬されるような、さまざまな技術をつくりました。だけど、本当にこれから日本人がですね、その世界に誇れるようなね、そういう建築をどんどんつくっていこうと思ったら、これまでの建築はね、外国のまねごとだったんだ。これからこそ、日本は、今までになかった建築を世界に発表して、そして、その建築に全世界が憧れるようなね、そういうこの時代をつくっていかなきゃなりません。そういう志を持つかどうかによって、それはできるんですよ。ぜひ、このアサヒグローバルがね、そういう全世界の人類が憧れるようなね、新しい建築というものを、この発表して、そして、全世界の需要を、この賄うようなね、そういう世界に冠たる建築会社になることを私は願っております。それはやろうと思ったらできますからね。やれないと思ったらできませんよ。富士山に登ったのは、富士山に登ろうと思った人間だけですからね。登ろうと思ってないのに、登っちゃったわと、これは病気ですからね、これは。登ろうと思わない、なろうと思わないとなれません。なろうと思ったらですね、すぐにでもなれるぐらいの、そういうこの条件を、日本の職業界は持ってるんですよ。日本の国の中にある、あらゆる職業はですね、世界の標準からいったら、最高レベルだ。全部がとにかくは。ちょっと頑張ったら、すぐ世界一に手が届くというのがですね、日本の現在のあらゆる職業の水準なんですよね。**

**ひょっとして、本当にアサヒグローバルはね、この世界一の建築会社になっちゃったりしたらね、もうここにいる皆さん方は、全部、もう各国の支店長ですよ。そうならざるを得ませんよ。格からいってね。みんなが一人一人、アサヒグローバルを代表して各国に出ていって、その各国の支店長になって、そして、各国から注文を取ってね、そして、仕事をしていくみたいなことに、これ、なってくる。アサヒグローバルが世界一となったら、そうなりますからね。そういうことを考えながらね、社長の夢を全社員が共有してね、ようし、頑張ろうとやっていかんといかんのです。とにかくこれからは。社員と社長が共通する夢を追い掛けるというね、それが株式会社の理想ですから。社長の夢をわが夢にして、みんながその目標達成のために頑張る。そうすれば、その会社は世界一だ。全世界の目標になる。ぜひね、そんなことも考えてみてもらいたいと思います。ここで前半を終わって、次、後半は人格を磨くというね、その具体的な話に入りたいと思います。じゃあ、10分間、休憩します。どうもありがとうございました。**

**司会：ありがとうございました。**

**（休憩）**

**芳村：それでは、後半の話に入りたいと思います。後半は、人格を磨くというテーマでですね、先ほど申し上げたように、人格には、高さ、深さ、大きさという、３つの次元があります。まずは、いったい人間はどこまで自分を高めることができるんだろう。その問いを持ってですね、われわれは、この仕事をし、生活をし、本を読むということをしなければならないと。そういう問いを持てばですね、そういう問いを持った人間にしか飛び込んでこない言葉、また、そういう人間しか気付かないことというのがあるんですよね。ただ漫然とね、本を読み、ドラマを見ておったんでは、決してこんな言葉は、この関心の中に入ってこない。そういうものがあってですね、とにかく、この人格というものをもっともっと成長させていく。それは、この人類の人間性を成長させるというね、人類の進化に関係する、これは重要な問題なんです。だけど、今は日本人がその先達となってですね、この素晴らしい人格、人間性というものを世界に率先垂範して見せなければならない。そして、その全世界の人たちが、ああ、あんな日本人みたいな、あんな生き方で、ああいう人間になれたら、どんな素晴らしいだろうとこう、言ってもらわなきゃいかん。そういうとですね、なんかものすごい立派な人になっちゃったりしてですね、えらい堅苦しいことになって、見本になっちゃったりして、大変なことになりそうだと思うかもしれませんけどね。**

**だけども、これからわれわれが目指さなければならない素晴らしい人間というのは、人間らしい人間なんですよね。神や仏のような人間を目指してはならない。神や仏みたいな心を持ってしまったら、人でなしだ。また近代人は、理性的な人間になろうとした。理性的な人間になることは、人間が理性の奴隷になることであって、それも人でなしだ。これからわれわれが目指さなければならない人間の姿は、まさに宇宙の摂理によってつくり出された、この人間にふさわしいね、そういうこの人間らしい生き方である。すなわち、宇宙の摂理によってつくってもらった人間が、人間として生んでくれた、生んでもらったことに感謝をして、喜びを持って、人間として、人間であることに自信と誇りを持って生きていくというね、そういうこの生き方をこれからわれわれは世界に示さなければならないんだ。**

**だから、われわれは、これから何をセントバーナードなのかと申しますとね、これからわれわれは、イエスを超えなければならない。釈迦を超えなければならない。孔子を超えなければならない。老子を超えなければならない。いつまでも、そんなやつ達といったら、ちょっと語弊がありますけどね。いつまでも、そんなやつ達をね、理想にしておったんでは、人間性の進化はあり得ない。もはや彼らは過去の人間たちだ。これからのわれわれには、新しい人間の目標と理想が必要なんだ。いつまでも、釈迦やイエスのように、神や仏のような心を求めるような、そんなこの生き方をしておってはならない。いついつまでも、聖人君子というふうなね、精神的理想主義を追求するような生き方をしておってはならない。いつまでも理性的な人間になることに憧れておってはならない。われわれは人間であることに自信を持って、人間であることに誇りを持って、人間であることに喜びを感じながらですね、生きていく。それが、この人間というものをつくってくれた母なる命である宇宙への、この感謝というかね、この愛の印だ。**

**これまでは残念ながら、人間として生んでもらってるのにね、なんで人間に生んでくれたんやといわんばかりにね、人間でありながら、神や仏を求め、人間でありながら、理性を求め、人間ではないものを求め続けておった。そんなことをしたら、お母さん、悲しみますよ。なんでこんな俺を生んでくれたんやと言われたら、お母さん、悲しみますからね。人間に生んでくれてありがとうと。人間であることに感謝をして、素晴らしい生き方をしようとすれば、母なる宇宙は喜んでくれる。それが道理ですよ。今、ようやく人間は、人間であることに目覚めたんだ。**

**これは、カール・ヤスパースというね、この大哲学者が20世紀にいたんですけども、このカール・ヤスパースがその歴史論の中でね、20世紀から21世紀にかけて、人類は第2の精神の目覚めのときを体験すると。第１回目の精神の目覚めというのは、このギリシャにおいて、ソクラテス、プラトン、アリストテレスが活躍し、中東地方においては、このモーゼ、アブラハム、いろんなそういう預言者たちが活躍をして、やがてイエスが生まれてきた時代。それから、インドにおいては、釈迦や六師外道といわれるですね、釈迦を中心にしたさまざまな、いろんな新しい考え方が、雨後の竹の子のごとく出てきてね、それをインドのその状況のことを、この釈迦ならびに六師外道という言い方を、外道というのは、これは仏教の立場からいったので、仏教以外の考え方というので、外道というんですけど。外道というと、いかにも悪いやつやというような、そんな感じの言葉にね、日本人は受け止めてますけど、元の言葉は、外道というのは、仏教とは違うほかの思想っちゅうだけのことなんですけどね。とにかく、釈迦以外に、釈迦の生きとった当時には、六師外道、６人の先生とですね、６つの説があったというようにいわれてるんですね。また中国には、孔子や老子やというようなね、そういうこの大思想家がどんどん出てきて、諸子百家という、百花繚乱という言葉がね、遣われましたけど、諸子百家といって、100人にもね、なるような、そういうこのいろんな考え方が出てきたというね、そういう時代。**

**それが、カール・ヤスパースの考え方によれば、人類の第１回目の精神の目覚めのときだったんですね。それは、今の心理力で共時性と呼ばれてね、全然関係ないのに、世界で同時期にいろんな同じような人が、うわっと出てきたという、人類全体がですね、あるときに、ある段階に到達して、そして、人類が全体として精神に目覚めたとき、それが、その紀元前５～６世紀を中心にした時代だったんですね。そして、これから20世紀から21世紀にかけてですね、第２の精神の目覚めのときを迎える。だけど、この第２回目の精神の目覚めとは何への目覚めなのか。それは、人間への目覚めなんだ。人間は今まで人間じゃなかった。これから、ようやく、宇宙によってつくり出された、この人間という命を自分が見つめ始めて、本当に人間として生きていくというときが、これから始まるわけであります。そのことによってね、われわれは、平和な世界というものをつくっていくというね、そういう段階にこれから入る。人間が人間として、安心して生きていくことができるような社会。ようやくこれからできるんですよ。**

**これまでは、戦争の連続だった。母なる宇宙は泣いてたんだ。自分のつくった子どもたちがね、互いに殺し合ってる。お母さんからしたら、兄弟げんかして殺し合ってるようなもんですからね。母なる宇宙は悲しかった。泣いておったんだ。ようやくこれから、われわれは平和というものを理念にし、目指しながらね、兄弟げんかしないで、親孝行して、お母さんに喜んでもらえるような、そういう生き方をする。そういう段階にこれから入るわけであります。ようやく今、人間は人間に目覚めようとしてるんですよ。真実の愛に目覚めようとしてるんですよ。キリストの愛ではない。釈迦の愛ではない。孔子の愛ではない。老子の愛ではない。本当の人間の愛に目覚めようとしてるんだ。それはなぜかといったらね、人間は社会的存在ですけども、まだ社会とはなんなのかということを誰も本当は、ちゃんとはわかってないんだ。これはぜひ、皆さん方にね、ちゃんと、ちゃんとちゃんとの味の素と申しましょうかね、ちゃんとちゃんとわかっとってもらいたいんですけどね。**

**とにかくは、社会というのはですね、自分とは違う性格の人がいる。自分とは違う人間性の人がいる。自分とは違う職業の人がいる。自分とは違う宗教の人がいる。自分とは違う考え方や感じ方や立場の人がおるのが社会だ。社会の中で生きていくっちゅうことは、自分とは違う性格や、自分とは違う宗教や、自分とは違う職業や、自分とは違う考え方の人と共に生きていくのが社会だ。社会性とはなんなのか。人間に要求される社会性とはなんなのか。社会性とは、自分とは違う性格や、自分とは違う考え方や、自分とは違う宗教の人と共に仲よく生きていく力が社会性なんだ。考え方が違うから、宗教が違うからといって、けんかをしたり、戦争をしてる人間は人間ではないんだ。社会性がないんだ。社会を破壊してるんだ。社会とはなんなのかということを、これからこそ、ちゃんと全人類に教えなければならないのは日本人だ。日本人は、あらゆる宗教を共存させながらも、けんかしていない。そういう文化をつくってきたんだ。世界はこれから、日本のこの文化の原形を見習わなければならないんだ。**

**日本はいろんなものを受け入れてきた。それを見事にちゃんと共存させてね、やってる。日本に来れば、イタリア料理も、フランス料理も、中国料理も、インド料理も、タイ料理も、もう何料理も全部ある。けんかしてない。こんなものは食えんちゅうようなことは言わない。建築でも、西洋建築もあれば、日本建築もあれば、どこどこ建築、カナダの建築もあれば、もうスウェーデンの建築もある。いろんな建築が入ってきてる。けんかしてない。違いを理由に闘う民族じゃないんだ。違いを利点として受け入れながらね、われわれは文化をつくってきたんだ。日本人こそ、全人類に本当に社会とはなんなんですかっちゅうことを説く、その資格がある。それだけの高度なね、民族の精神性というものを日本人はこれまでの伝統の中で育んできたんだ。異なるものを拒否しない。それを受容して、自分のものにして、もっと発展させていく。それが日本人だ。**

**今、まだ世界は、違いを理由に闘う時代なんだ。まだ。だけども、これから世界が目指さなければならない理想はね、もうすでに国連のユネスコのユネスコ憲章の中に書いてある。ユネスコ憲章の序文の言葉、知ってますか。もうこれは、この講座で何回も申し上げたのでね、知ってらっしゃる方もいらっしゃるというか、ちゃんと聞いとったら、みんな知ってるはずなんですけども、ユネスコの、ユネスコ憲章の序文の言葉、「戦争は人間の心の中から始まるのである。だから、人間の心の中に平和のとりでを築かなければならない。」これが、これから人類が目指さなければならない世界の姿なんだ。全人類が自分の心の中に平和のとりでを築かなければならないんだ。だけど、まだ現在の人類は、誰もその平和のとりでを心の中に持ってない。違いを理由にけんかする。まだそういう人類だ。だけど、その人類の人間性をこれからわれわれは変えなければならないんだ。心の中に平和のとりでを築く。心の中に平和のとりでを持った、そういう人間性に人類を成長させなければならないんだ。**

**そのために、まず、われわれは、率先垂範して、それができる、心の中に平和のとりでを持った人間に日本人がまずなってみせなければならない。やろうと思ったら、やれるということを見せなければならない。闘わなくてもいいんだ。どんな、各国の食事がある、各国の建築がある、各国の宗教がある、各国の文化が日本にはある。日本人は闘ってない、けんかしてない。それがどういう人格なのかということを、われわれはこれから世界に見せなければならないんだ。そのために、まず世界に対して何を説かなきゃならんのか。それは社会とはなんなのかっちゅうことを教えなければならないんだ。社会とは、自分と違う性格の人がいる。自分とは違う職業の人がいる。自分とは違う宗教の人がいる。自分とは違う考え方や、感じ方や、立場の人がいる。社会性とは、自分とは違う性格や、自分とは違う考え方の人と共に仲よく生きていく力のことを社会性というんだ。そして、人間は社会的存在なんだ。人間は、人間に生まれてきても、人間の社会の中で育てられなければ、人間にはならない。**

**あのインドで1920年に発見されたね、オオカミ少女のようにですね、人間の子どもに生まれてもですね、オオカミにさらわれてしまって、オオカミのお母さんのおっぱいを飲んでしまったら、『狼少年ケン』になっちゃうんだ。ひょっとして、ひょっとして、猫にさらわれちゃったりしてね、猫のお母さんのおっぱい飲んじゃったら、猫少年ニャンですからね。犬にさらわれちゃったら、犬少年ワンになっちゃいますからね。人間は人間の社会の中で育てられなければ、人の子どもに産まれてきても、人間にはならない。人間は本来、社会的存在なんだ。しかも、自分という命がね、ここにあるということは、その背後に２人の人間がいなきゃならんのだ。それはお父さん、お母さんです。お父さん、お母さんは、元からお父さん、お母さんじゃないんですからね。元は他人だった。元は他人のお父さん、お母さんがくっついて、お父さん、お母さんになって、自分が生まれてきた。自分という存在は、原理からいって社会を背負ってるんだ。人間は本来的に社会的存在なんだ。だから、社会性とは、いわゆる人間性なんだ。社会性がないということは、人間じゃないんだ。ということは、今の世界の人類は人間じゃないんですよ。これから人間になるんですよ。ようやくそのときを迎えた。それが、カール・ヤスパースが言うね、第２の精神の目覚めなんだ。**

**どういう精神に目覚めるのか。それは社会とはなんなのかということをちゃんと知ることだ。愛とはなんなのかということをちゃんとちゃんとのね、味の素でね、ちゃんと知ることなんだ。そして、ようやく人間は人間に目覚めるときを迎えたんだ。社会とはなんなのか。真実の愛とはなんなのか。自分と同じ考え方の人間しか愛せないような愛は愛ではない。愛は他者を愛するために存在するんだ。男が女を愛し、女が男を愛する。それが愛の本当の姿だ。自分と同じ考え方の人間しか愛せないという人間は、本来、自分しか愛せない人間だ。そんな愛は偽物の愛だ。そんな愛を、命はつくったんじゃない。命がつくってくれた愛は、理屈を超える力だ。自分と同じ考え方しか愛せないような愛だったら、愛なんかいらん。理屈で十分、理性で十分。なんで愛が必要なのか。それは、違う性格の人と共に生きていかなきゃならないからだ。なんで今、そんなことを言うんだ。それは、考え方の違いで、感じ方の違いで、夫婦が離婚してるからだ。離婚の激増が止まらないからだ。違いを理由に別れるという不幸な、そんなことでどうするんだ。本当の愛を取り戻さなかったら、家庭は崩壊するんだ。社会は崩壊するんだ。夫婦が離婚して、親が子どもを殺せば、社会は根底から崩れてるんですよ、今。例え夫婦が離婚してなくても、決して幸せではない。みんな。我慢してるんだ。耐えてるんだ。そんなことで、どうして幸せか。**

**われわれは、違う考え方を持つ人間と共に生きる喜びを発見しなければならない。同じ考え方や、気の合う仲間と共に生きる不幸を感じなければならない。今はまだその反対ですからね。気の合う仲間と一緒におったらいいんやと。気の合わんやつと無理に付き合う必要はないというのが現在ですからね、まだ。ほとんどそうなんだ。だから、それはなんなのかといったら、それは成長できないという状態に自分を置いてることであって、易きに流れる。安逸をむさぼる人生だ。人間は本当に成長しようと思ったら、本当に成長する願いを持っておるんだったら、気の合う仲間と同じようなものを持ってる人間と付き合ってどうするんだ。それでは成長できない。自分にないものを持ってる人間と付き合って、自分にないものを相手から積極的に学び取っていってね、そして、僕は君と出会ったから、こんなことを勉強できて、こんなことを教えてもらえて、それで、その結果、こんなに成長できました。ありがとうねといって、自分と違う考え方の人間に感謝ができる。そういう意識が、そういう力が育って、初めて夫婦は本当の幸せを感じるんだ。**

**違いが出てきたって、その違いがあるが故に、お互いに教え合えるというね、愛が始まるんだ。同じだったら、教え合えないのね。違うから教え合える。教え合う喜び、学び合う喜び、互いに違う力を結び合わせて、協力し合う喜び、助け合う喜び。それが夫婦だ。それが社会だ。その力を持ったとき、人間は心の中に平和のとりでを築くことができる。ようやく戦争はだんだんなくなってくるはずだ。そして、離婚の激増はストップできる。そして、自分と違う考え方を持った子どもにむかつくとは言えない。そんなことを考えることができるようになったのか。すごいなって褒めてあげることができる。ようやくそれで人間になったんだ。それが人間なんだ。それが宇宙がつくってくれた本当の人間の姿なんだ。これから、われわれは人間になるんだ。現在の人類はまだ人間になってない。姿形は人間でも、まだ心が人間に、まだ成長してないんだ。これまでは、人類が人間へのプロセスを歩んできたんだ。だんだん、だんだんと人類は歴史を進むにしたがって、人間とはなんなのか、本当の人間とはなんなのか、それに近づいていくんだ。**

**究極の原理からするならばね、人類が持って生まれてきたこの染色体の中にある遺伝子ですね。潜在能力を全部出し切ってしまわないと、人間とはなんなのかわからないんですよ。まだ人類は、持って生まれてきたね、人類に与えられた遺伝子を３割しか使ってない。脳は３割しか生かされていない。まだ人類は３割しか人間じゃないんだ。あと７割、可能性として残っておる。それが全部、出てきたとき、初めて人間とはなんなのか。宇宙がつくってくれた、母なる宇宙がつくってくれた人間とはなんなのかが、ようやくわかるんだ。まだまだこれから人類は人間になるんだ。完成された人間への道はまだまだ遠い。だけど、ようやく今、われわれは、神や仏に憧れたり、理性に憧れたりする段階から、ようやく人間として生きていく出発点に立ったんだ。ようやく、お母さん、ありがとう。人間に生んでくれてありがとう。うれしいよ。感謝しながらね、人間として生きていくことに、幸福と喜びを感じる人生がこれから始まるんだ。そのために、われわれは、社会とはなんなのか。真実の愛とはなんなのか。まずそれを知ることなしには、人間にはなれない。**

**われわれは、本当に人間性を持って、人間らしく生きていこうと思ったならば、宗教でけんかをしたらいかん。神が違うからってけんかしたらいかん。宗教は人間のためにあるんだ。人間がつくったものが、人間がつくった文化なんだ。経済も人間のためにあるんだ。人間が経済のためにあるんじゃないんだ。人間が宗教のためにあるんじゃないんだ。人間が神のためにあるんじゃないんだ。神も宗教も人間のためにあるんだ。神や仏のために人間がけんかして殺し合ったり、戦争して神が喜んでるはずはない。人間をつくった神がね、人間同士が殺し合って、どうして喜ぶんだ。人間をつくって、自分の生んだ子どもたちが殺し合ってて、お母さん、うれしいですかっちゅうことですね。そんなはずはない。とにかく人間は、これから本当の人間とはなんなのか。人間として生きるとはなんなのか。そのことがだんだんとわかってくる時代に入る。ようやく社会とはなんなのかということをね、全人類が知るときがきたんだ。まず皆さん方からね、皆さん方の友達に話してもらいたいし、また結婚したら、自分の子どもに話してあげてもらいたい。また、その子どもに子どもができて、孫が生まれたら、その孫にも話してもらいたい。社会とはなんなのかということを。そして、また愛とはなんなのかということを語ってもらいたい。**

**社会とは、自分とは違う性格の人と共に生きていくのが社会だ。自分とは違う考え方の人と共に生きていくのが社会だ。自分とは違う宗教の人と共に生きていくのが社会だ。自分とは違う職業の人と共に仲よく生きていくのが社会なんだ。自分とは違う考え方の人とですね、共に生きていくことができなければ、その人は社会を破壊してるんだ。社会性がないんだ。ということは、人間性がないんだ。ということは、人間じゃないんだ。そして、自分とは違う考え方の人と共に生きていかなければならないから、理屈を超えなければならない。理屈を言ったら、考え方の違いやと、絶対、一緒にやっていけん。現在まだそうですからね。同じ価値観やなかったら、一緒に仕事ができるはずはないやないか。同じ考え方やなかったら、一緒に生きていけるはずはないやないか。違っとったらけんかになるやないか。それが今の時代ですからね、まだ。だけど、人間は責め合えば地獄なんですよ、本当に。そんなこと言わんでもわかってる話ですけど、責め合えば地獄だ。互いに許し合って、認め合って、どうしたら考え方の違う人と共に仲よく生きていくことができるんだろう。それを考えるために理性を使って、そして、ようやく人間になるんだ。**

**とにかく責め合えば地獄。許し合うって、愛を持たなかったならば、人間の社会は不幸の連続だ。だけど、多くの人間が理性故に、人を責める心を持っておる。許し合う美しい心を見失ってしまっておる。許さないことが正義だと思ってしまっておる。罪を犯した人間をね、責めて、責めて、責め抜いて、刑を科して、相手が苦しんでるのを見て、当たり前やないか。ざまあみろと言ってる。それは決して人間らしい、温かな、優しい心ではない。人が罪を犯したと思うからね、責めるんですよ。だけど、自分、人間は罪を犯す、罪を犯したくて犯すんじゃないんだ。罪なんか犯したくはないんだ。失敗なんかしたくはないんだ。裏切りたくはないんだ。だましたくはないんだ。うそなんか言いたくないんだ。だけども、不完全なるが故に、追い込まれてしまって、苦し紛れに心ならずも人間は罪を犯すんだ。どんな大悪人でも、罪を犯したくて犯すんじゃないんだ。切羽詰まって、どうしようもなくなって、そうせざるを得ないような状況に追い込まれてしまって、そうなるんだ。だから、自分がもしそうなったときのことを考えたら、はっきりわかってくる。自分がその罪を犯してしまったら、どういう気持ちか。ああと思って、もう真っ白ですよね。悲しいですよ、つらいですよ、苦しいですよ。**

**もう本当に、もう、罪を、交通事故でもね、交通事故でも、やっちゃったと思ったらね、もう本当、真っ暗ですもんね。どうしようと思いますもんね。ましてや、何かしら罪を犯してしまって、警察に捕まらなきゃならんような状況になってしまったら、本当に真っ黒も真っ黒、真っ黒けのけでね、本当にもう人生真っ暗ですよ、本当にもう。どうしよう。ああと思って、もうなんとも言いようのない、心の苦しさが出てきますよね。罪を犯した人間のその悲しさ、つらさ、苦しさがわかったならば、そう簡単には責められませんよ。これは罪を犯したら、それは償わなければならない。だけども、誰も罪を犯したくて犯すんじゃないんだ。だけども、普通は罪を犯して刑務所から出てくれば、あいつはムショ帰りだ。あいつは少年院帰りだ。そういう目で見るから、更生できない。立ち上がれないんだ。まともに生きられなくなってくる。みんながそういう目で見るんやったら、もういっぺん、悪に帰ったろうやないか。また罪人になってしまうんだ。それが世間だ。そんな世間でいいんですかということですね。それが人間ですか。そんな悲しい、そんな醜い心でいいんでしょうかと。もっともっと人間性は進化しなきゃならん。まだ10のうち、３つしか人間になってないんだ。人類はね。ようやく今、これから人間に目覚めるんだ。そして、もっともっと人間として成長していくんだ。あと７割も可能性が残ってるんだ。それが脳生理学の答えだ。**

**とにかく、まずは社会とはなんなのか。そこから出発しなければならない。そして、真実の愛とはなんなのか。それを考えなければならない。そして、だんだん、だんだんと自分の心の中に平和のとりでを築かなければならない。自分が対立を呼び起こすような、そんなこの醜い人間になってはならない。違いを理由にしかとをし、違いを理由に排除をし、違いを理由にいじめてね、何も感じないような、そんな人間では、人間ではない。社会とは、自分と違う性格の人と共に生きていくのが社会だ。社会性とは、自分とは違う考え方の人と共に仲よく生きていく力だ。どうしたら自分と違う考え方の人と共に仲よく生きていけるのか。それは、違うということは、相手が自分にないものを持ってるんだ。だから、相手から学ばなければならない。相手から教えてもらわなければならない。そしたら、自分が成長できるんだ。愛というのは、そんな生っちょろい、恋愛沙汰のもんじゃない。愛は苦しい努力だ。だけど、そこに人間同士が共に仲よく生きていく喜びが生まれてくる。だから、愛には価値があるんだ。相手から学ぼうとすることが愛だ。お互いに教え合うことが愛だ。責めることはその反対だ。**

**とにかくこれからですね、日本人は、そういう意味で、社会で最初に人間性の進化を実現し、そして、世界にこれからどう生きなきゃならんかを教えなければならない、そういう役割をね、みんなやってるんだ。だからこそ、われわれはこの人格を磨く、人格を成長させる、そのことをまず最初に達成しなきゃならない民族だ。今、世界は、物質的にはこんなに豊かになったのに、人間性そのものは全然成長してないやないかと。むしろ人間性は、全世界の人類は、人間性において、その品格が堕落してると。品格がなくなってる。みんな人間って醜くなってる。格好を見ても、だらしがない。汚らしい、醜い、こんなんでええんか。そういう反省なんですよね、今の人類は。洗練されるどころじゃない。反対に野蛮になり、醜くなってしまってる。物質的にこんなに豊かになったのに、人間性そのものは堕落の一途じゃないか。なんとかせんないかんというのが、今の世界のね、文明としての反省点ですからね。**

**じゃあ、その精神の成長、人間の品格の成長、人間としての本当の生き方というのを誰が教えるんだ。それはもう日本人しかない。誰もできない。われわれ一人一人が、新しい生き方に目覚めてですね、人間としての誇りを持って、人間であることに喜びを感じながら生きていくというね、そういう生き方をこれから、われわれ自ら見せて教えなければならない。率先垂範しなければならない。だけど、人間として生きることは苦しいことじゃない。むしろ自由と開放感を味わいながら、楽しいことなんだ。人間として生きる基本は、自分のしたいことをすることなんだ。今までの人類は、自分のしたいことをしたらいかんと。自分のしたいことを抑えといて、しなければならないことをちゃんとやらないかん。そういう理性的なね、生き方をしてきたから、抑圧が掛かって、苦しかったんだ。だけど、これからは、自分のしたいことをせんないかん。欲求を実現することが人生だ。だけど、欲求そのままぼんとぶつけたら、動物だ。人間には理性がある。感性だけでは、心ではない。理性だけでは、心ではない。理性と感性の協力によって、人間らしい心は生まれるんだ。**

**じゃあ、どうするんだ。自分のしたいことをどうすれば、多くの人に迷惑の掛からん方法で実現できるだろうか。それを考えるために理性を使う。そうすると、心が成長してくる。心が育ってくる。他人に対する思いやりが出てくる。そして、そこから愛が出てくるんだ。愛の根底には、思いやりがありますからね。心遣いがありますからね。まず心ができなければ、愛はできない。心をつくる原理は、理性と感性の協力だ。自分の欲求、自分の欲望、自分の興味、関心、好奇心、この命から湧いてくる、俺というものをね、どうすれば、みんなに迷惑を掛けないような仕方で実現できるだろうか。それが人生だ。それが社会性だ。人間らしく生きるということは、最も自由な、最も開放感がある、最も喜びがある、命が燃えるんだ。だから、決して人間らしく生きることはつらいことじゃない。最も喜びのあることなんだ。最も自由な生き方なんだ。あらゆるものから解き放たれるんだ。ようやくそういう生き方をですね、人間はすることができる力を持った。だけども、よく考えてみたら、これまででも、成功した人間、幸福な人間は全部それ、やってきたんだ。みんな自分のしたいことをやってきたんだ。だけど、原理としては、そうじゃなかった。原理としては、理性に従うという、そういうこの原理、人生観であった。とにかくそんなことをね、考えながら、この人格を磨くということを聞いてもらいたいと思います。**

**とにかくですね、そのまずは、人格の高さをつくる。いったい人間はどこまで自分を高めることができるんだろうか。人格の高さとはなんなのかということをね、まず考えてみてもらいたい。感性の哲学、これは観念論で、理屈で考えるんじゃないですからね。だから、感性の哲学は、感性の実感を原理にしながら考えるんですから、だから、まずはこの自分はいったいどういう人に人格の高さを感じるかなということを思い出してもらいたい。この感性の事実をまず、ちゃんと確認してもらいたい。どういう人に人格が高いと感じるかですね。そこからまずは、この考え方は始まるんだ。結果としてどういうことなのかといったらね、大人は子どもに人格の高さは感じません。また、先進国の教養レベルの高い人間が、教育を受けてない後進国の人間に人格の高さは感じません。そういうところから、何がわかるのかといったらですね、人格の高さというものは、その人間の教養レベル、教養の量に関係してると。ということが、まずわかってくるんですね。その人間が生まれてから今日までに獲得してきた知識と技術と教養の量がね、人格の高さというものをつくる原理だ。**

**だけども、大事なことは、だからといって、たくさん知識を持ってるから、人格が高いんじゃない。たくさん知識や技術や教養を持ってるから、人格が高いかといったら、そういうわけではない。そうとは限らない。だけども、人格が高いというふうに感じる人は、必ず自分よりも、たくさんの教養、知識、技術を持ってるんだ。自分よりも、少ない知識の量の人、自分よりも少ない教養の人、そういう人に、その自分よりもですね、その教養レベルの低い人に人間は人格の高さを感じることはないんだ。ということは、たくさんの知識や技術や教養を持ってるということは、人格の高さをつくるための必要条件である。じゃあ、十分条件はなんなのか。最終的に人格の高さを決定する要因はなんなのか。**

**この必要条件がわかって、次に十分条件を考えるという方法論があるんですよ。これはね、この必要条件がわかったならば、その必要条件がどうして出てくるのか。必要条件の根拠を追求していくと、十分条件は出てくるんですよ。ということは、その人格が高いということになるためには、他人よりも、より多くの知識や技術や教養の量が必要だ。じゃあ、その必要条件はどうして出てくるんだ。どういうふうにしたら、知識や技術や教養の量が増えるのか。これは、現実的にはですね、学校で、学年が進むにしたがって、より高度で、より厳密な知識や技術が与えられて、そして、だんだんと人間はたくさんの知識や技術や教養を獲得するんですね。じゃあ、教育とはなんなのか。教育の目標は人間をつくることだ。決して、知識や技術や教養を与えること、そのことが教育の目的ではない。教育の目的は人間らしい人間をつくることだ。そのための手段として、学校は学年が進むにしたがって、より高度で厳密な知識や技術を与えるんだ。じゃあ、それを手段として、人間らしい人間をつくるとは、何をつくることなのか。これは教育哲学ですけどね、そんなことを考えなければならない。**

**学年が進むにしたがって、より高度な知識を与えることを通して、教育は人間をつくろうとしてる。じゃあ、何をつくれば、人間をつくったことになるのか。どうして教育は、学年が進むにしたがって、より高度な知識や技術を与えるのか。そこにはどういう意味があるのか。それを考えるならば、そこからこの人格の高さをつくる、この十分条件、最後の原理が出てくるんですね。教育とはいったいなんなのか。それは、より高度な知識や技術を与えるということを方法論として、手段として用いることによって、人間の心の中にどこまでもより高度なものを求めていきたい。どこまでも、より厳密なものを求めていきたい。どこまでもより真なるものを求めていきたい。どこよりも、どこまでもより善なるものを求めていきたい。どこまでも美しいものを求めていきたい。この価値への欲求、価値への情熱を人間に呼び覚ます。それが実は、教育が人間をつくるという目的のもとでしようとしてることなんだ。**

**すなわち、人間をつくるとは、どこまでもより高度なものを求めていきたい。どこまでもより厳密なものを求めていきたい。どこまでもより真なるもの、善なるもの、より美しいものを求めていきたいんだという、この価値への情熱、欲求、この価値への情熱、価値への欲求をつくることが、実は人間をつくるということの真実の意味なんだ。人間をつくるとは、何をつくることなのか。それは、価値への情熱を人間の命に植え付けること。価値への情熱を呼び覚ますこと。それが人間をつくるということなんだ。なぜそれが、人間をつくることになるのか。どんなことをする場合でも、どんな仕事をする場合でも、どんな生き方をする場合でも、このどこまでもより高度なもの、どこまでもより厳密なもの、どこまでもより真なるもの、善なるもの、より美しいものを求めていきたいという欲求さえ持ったならば、情熱さえ持ったならば、人間は絶対に人生を誤らない。また素晴らしい人間にならざるを得ない。**

**人間の住む世界は価値の世界であるということはね、前回、申し上げました。人間は価値の世界に住んでおるんだ。だからこそ、人間は、人間の本質において、価値への情熱を持たなければ、人間ではないんだ。人間をつくるというのは、価値の情熱をつくることだ。価値への情熱とはなんなのか。どこまでも、より高度なものを求めていきたい。どこまでも、より厳密なものを求めていきたい。どこまでもより真なるもの、善なるもの、より美しいものを求めていきたい。それが人間の印、人間としての魂に属するもんだ。それが、その価値への情熱を持っておるかどうかによって、人格が高くなるかどうかが決まるんだ。たくさん知識を持ってるから、人格が高いんじゃない。どこまでもより高度なものを求めていきたい。どこまでもより美しいものを求めていきたい。それが、まさに高貴なる精神そのものだ。高く尊い、高貴なる精神そのものだ。**

**本当にわれわれが、人格の高さを求めるならば、はたして俺の中にその価値への情熱が燃えさかっておるかということを問わなければならない。俺は本当にどこまでも高度なものを求めていきたいという欲求を持っておるのか。俺はどこまでも厳密なものを求めていきたいという欲求を持っておるのか。それを問わずしては、職業人としての社会的責任を果たし得ないんだ。社会人では、あり得ないんだ。人間は価値の世界に住んでおるんだ。だからこそ、人間らしい人間であるならば、この価値への情熱なしには人間とはいえない。本物の人間とはいえない。そのことをね、われわれ、まず意識する必要があります。はたして、俺の中にその価値への情熱が燃えさかっておるか。これも価値への欲求がなかったならば、残念ながら原理としては、人間ではない。人間であることを見失ってしまっておるといって過言ではないんだ。それほどに、人間として、この価値への情熱というのは、欠くことのできない重要な原理であって、それが人間性を進化させる、非常に大事なエネルギーになってくる。**

**それから、まず自分を磨いていこうと思ったら、自分の人間性を成長させようと思ったならば、とにかくは、自分の心の中に、何をするにおいてもね、この価値への情熱、価値への欲求、どこまでもより高度なものを求めていきたい。どこまでもより厳密なものを求めていきたい。どこまでもより真実なるものを求めていきたい。どこまでもより善なるものを求めていきたい。どこまでもより美しいものを求めていきたい。美しいものが欲しい。そういうことをね、自分の心の中で感じてなかったならば、その人は本物の人間とはいえないんだ。だから、自分が本物の人間であろうとするならば、また本物の人間になろうとするならば、はたして俺の中にこの価値への情熱が燃えさかっておるか。それを自分に問いたださなければならない。まずそこから、人格を磨く。人間性を成長させることが始まるのである。**

**これは社員教育においても、すべてそのことが自覚されていなければ、真の教育はあり得ないんだ。まず教える側においてね、自分がより高度なものを与えるということは、相手の中に、社員の中に、どこまでもより高度なものを求めていきたいという欲求を呼び覚ますために、俺はそれをしてるんだという自覚がなかったならば、社員教育も人間教育も成り立たないんだ。そして、また学ぶ側においてもね、俺がより高度なものを求めていくということをさせられてるということは、俺の中に価値への情熱をつくるということを俺はしてるんだということをですね、自覚しながらやってなければ、また教育効果は上がらない。教える側にも、教えられる側にも、その共通するね、そういうこの意義というものがちゃんとわかっておって、初めて教育効果は高まるのである。単に知識だけを与え、技術だけを与え、教養だけを与えて、それで終わってしまっては、それは知識教育であって、人間教育ではない。人間教育は、知識や技術や教養を与えることを手段として、最終的に価値への情熱を植え付けること。そういう人間にしてあげることが、その人間を幸せにすることなんだ。**

**どこまでも、より高度なのを求めていきたいという情熱を持った人間は、幸せにならざるを得ない。それが人間をつくるということである。そのことが、まさに高貴なる精神、人格の高さを表現するものである。そういう意欲を持った人間が初めて、あの人はなかなか人格の高い人やなというね、そういうこの評価をですね、受け、尊敬されるという、そういう状態になるわけですね。とにかく自分がどんな人に人格の高さを感じるかということをね、思い出してもらったら、だいたいそういうことはわかってきます。この人格の高さをつくるということは、本当はちゃんと話せばね、それだけでも３時間という内容があってですね、なかなかこれは大事なことでもあり、また深い問題なんですよね。だから、もしまた来年ね、お話をさせていただく機会があったならばね、今、ざっとお話をしておいて、また来年、もっとそれにより詳しいことをね、お話しするという計画を立てようと思ってますけども、とにかく一応、その人間が人間の格を持って、その格を磨いていくということはどういうことなのかということを一応、この理解しておいてもらってね、そして、これからのいろんな仕事の参考にしてもらいたいと思ってるんですよね。**

**次は、この人格の深さをつくると。深いというのは、いったいなんなんだ。この深さとは何かということをですね、簡単に言ってしまうと、どういうことになるかというと、深いというのはこれ、なんなのかといったら、物事のより根源的で、より本質的な意味や価値を感じ取る力が深さなんだ。相手が自分よりもですね、より物事の根源的で、より本質的な意味や価値を表現するようなことを口に出したり、行動に出したりしたときに、あいつはなかなか深いなとこう、感じるんですね。深さとは、物事のより根源的で、より本質的な意味と価値を感じ取る力。その感性が、深さというものを表現するんですね。じゃあ、そういう深さを持った人間に自分がなるためにはどうしたらよいのか。そのためにはですね、人間の目は外を向いてる。人間の目が外を向いてる間は、絶対、深さはできない。この外を向いておる目がですね、自らの内心をのぞき込むというね、そういう内省、実際の目に転換したとき、人間の心は、人間の意識は深く掘り下げられるというね、そういうこの、きっかけをつかむんですね。**

**じゃあ、どうすれば、自分の外に向かっておる目を、自分の内心に向けることができるのか。そのためには、何かしら、苦労とか、問題とか、なんかしら、そういうこの、障害にぶつからなければならない。物事がうまくいってる間は、人間性の深さは形成されない。何かしら、自分の中で否定的なですね、自分の内心をのぞき込んで反省するような、否定的な力が付け加わらなければですね、人間性の深さ、あるいは深くものを見るようなことはなかなかできてこない。実際問題、人類がですね、人類が類として、人間性の深さを獲得したのは中世である。西洋においては、中世1,000年間と言われてですね、そのキリスト教という宗教の中で、西洋人の人間性の深さ、心の深さは形成されました。なんで彼らは、とてつもない深いね、そういうこの精神性、心というものをですね、表現する力を持ったのか。それは、キリスト教という信仰の中でですね、自分がどんなことをしてるときでも、人間の目はごまかせても、神の目から逃れられない。自分がどんなことをしてるときでも、神は自分を見つめておる。神は自分の心の中にある。心の中にある神だけはだませないというね、そういうこの意識を持ってですね、何をしておるときでも、神はだませない、神の目からは逃れられないというね。そういうこの意識で、自分を見つめるということをしたと。そのことによって、とことん内省、自省の心、自分の内心を見つめ尽くすということをしたんですね。そこから出てきたのが、西洋人の持っておる深さである。**

**だから、西洋文化の深さとか、西洋におけるですね、文学の深さは全部、もうそのキリスト教にこの原因というかですね、その土台があるんですね。日本人でも、日本民族のですね、精神性の深さが形成されたのは平安時代だ。仏教的な意識でですね、その人間が生きておった。仏というものをこう、意識することによって、人間がいかにこの煩悩の多いですね、仏から見たらですね、非常に汚れたですね、心を持っておるのかって、そういうふうなですね、意識で、中世の時代は仏と人間を対比しながら自分自身を反省するということが、文化としてなされたんですね。そのことによって、日本人は、民族としてですね、日本民族の魂の根底に触れるところまで、自分自身を透徹して見据えていった。そのことによって、日本文化の深さというのが、平安時代に形成されました。その深さが形成されたが故にですね、鎌倉時代になって、急に日本文化の花が咲く。日本精神の根源から、何かしら湧き上がるものが出てきてですね、そして、ようやく日本人は、日本精神の、日本魂というものをかたちに表現するということをできるようになったんですね。**

**何が出てきたのかといったら、仏教でも、日本仏教といわれてですね、インドや中国にはない独特のこの高度なですね、精神性を持った仏教、日本仏教というものがどんどん出てきて、法然とか、親鸞とか、日蓮とか、道元とかね、一遍とか、いろんな人たちが出てきて、その独特の宗教論を展開した。また建築でも、書院造りというね、簡素な美学という、この日本人独特のですね、この精神を表現する書院造りというね、簡素な美学というものを表現した建築ができた。仏さんでも、このインドや中国の仏さん、非常に荒っぽい仏さんですけどね、雑な仏さんですけど、日本人がつくった、運慶、快慶がつくった仏様は芸術作品だ。また、その刀でも、本当は刀は人を斬るもんだけど、日本刀は芸術作品だ。独特の反りと刃形を持ったですね、まさに床の間に据えて眺めることによって、心が磨かれるような、まさにそういう芸術作品だ。また、その延長線上で、室町時代になればですね、幽玄であるとか、わびさびとか、そういうふうなですね、独特の深さを持った、そういうこの芸能、芸術が生まれていた。**

**ヨーロッパにおいても、なんでこのヨーロッパ人は近代科学というね、この高度な文化をつくり出すことができたのか。それは、中世の時代において、西洋人たちが、自分の心を深く掘り下げたが故に、その深さに対応する高さを持った文明ができたんだというようにいわれておるんですね。高く飛び上がるためには、深く屈伸しなければならない。どれだけの高度な文明ができてくるかは、どれだけ深く自分の心を掘り下げたかによって決まるんだ。そういうふうに言われてるわけですね。西洋における科学技術文明の高度さ。あるいは、日本におけるこの鎌倉から平安時代における、見事な芸術のですね、この開花。これはまさに、中世の時代において、その民族が自らの魂の根底に届くところまで、自分を掘り下げた、見据えた故に、出てきたこの文化の価値なんですね。**

**とにかく、この人間がですね、人格の深さということを形成していくためには、何かしら、そういう否定的な要因、失敗だとか、罪を犯すとか、この苦しみにぶつかる、悩みにぶつかるという、そういうことがなかったならば、人間は自分を反省する、自分の心を見つめ尽くすという、そういうきっかけを持つことができない。だから、深い人間になる。深さを持った人間になるためには、何が必要なのかといったら、人生において、さまざまな問題、悩み、苦しみ、苦労、忍耐、そういうものがですね、この出てきたとき、人間は自分が深くなるというきっかけをつかむんですね。だけど、苦労すれば深くなるかといったら、そういうわけではない。だけど、苦労がなかったならば、絶対深さはできない。だから、苦労とか、悩みを持つということは、これは深さをつくるための必要条件だ。だけども、その苦労とか、悩みとかっていうものにはですね、その質の違いがある。質の違いですね。質の違いがある。とにかく、深さというのは、その人間が生まれてから今日までに体験してきた苦労と悩みと、この努力の質に関係するのが深さですね。質というのはなんなのか。苦労すれば深くなるんじゃなくって、この質が問題なんだと。**

**それはどういうことなのかといったらですね、苦労をしてもですね、この問題、悩みにぶつかって、その問題、悩みから、この逃げるというね、そういうふうな、その仕方で苦労すると、深さができないんですよね。苦労、問題にまともにぶつかっていくということをすると、このまともにぶつかっていくから、深さができる。この人格の深さ、高さというのは、これは木に例えればですね、人格の高さは地面から上に出てる幹の部分だ。深さというのは、これは根っこの部分だ。根っこというのは、だいたいこの地中に伸びていったなら、どっかで岩盤とぶつかるんですね。木の根であればですね、岩盤とぶつかったときに、その岩盤を避けて通ろうと思ってね、その真っすぐいかないで、横に曲がっていっても、決して差し支えないんですけど、人間が苦労にぶつかったときにね、その、この苦労を避けて曲がっていこうとすると、根性が曲がっちゃうんですね、根性が。根性曲がりになってしまう。まともに物事が見えないような、そういう状況で、この根性が曲がってしまう。人生の苦労というのはですね、逃げて助かるもんじゃない。皆さん方もいろいろ体験したと思うんですけど、人生の苦労っちゅうのは、逃げれば逃げるほど、ますます苦しくなり、ますますつらくなるんだ。逃げて助かるもんじゃない。**

**これは仏教では、人生、逃げ場なしということを言うんですけど、人生の苦労には逃げ場がない。逃げれば逃げるほど、苦しくなる。逃げようとすれば、逃げようとするほど、自分の肩にのしかかるつらさは、ますます重くなってくる。ということは、人生の苦労というのは、逃げても苦労、ぶつかっていっても苦労。だから、同じ苦労するなら、逃げて苦労するような、そういう資の悪い、成長できないような苦労をするんじゃなくて、まともにぶつかっていくというね、そういうこの成長できるプラスの苦労をしなければならない。逃げても苦労、ぶつかっていっても苦労、同じ苦労するなら、ぶつかっていかなきゃ損、損というと、なんとなく阿波踊りを踊ってるみたいな感じになりますけど、とにかくは、逃げても苦労、ぶつかっていっても苦労、踊るあほうに見るあほう、同じあほなら踊らな損、損でですね、ぶつかっていくという、まともな苦労をしないと、人間性の深さは出てこないというね、そのことをまずは原理として知っていなければならない。**

**人間が本当に人間性の深さというものを獲得していこうと思ったならば、問題、苦労、悩みから逃げたらいかんと。でも、なんで逃げたらいかんのや。それは問題、悩み、苦労というのは、人間を苦しめるために出てきてるんじゃないんだ。問題、苦労、悩みは、人間を成長させるために、会社を発展させるために出てきてくれてるんだ。問題もない、悩みもない会社には、成長はない。問題もない、悩みもない人間には成長はないんだ。なぜかといったら、問題がないということは、今、自分の持ってる力でなんでもできてるんだ。今、自分の持ってる力でなんでもできてるんやったら、もう成長はいらん。人間は、今、自分の持ってる力でなんともならんという状態にぶつかったとき、初めて、今、自分の持ってる力でなんともならんのだから、なんとかしたいと思ってると、潜在能力が湧いてきて、能力が成長するんだ。問題にぶつからなければ、人間は成長しない。会社も同じなんだ。会社も成長しない。問題のないような会社は成長しない。問題意識がなかったら、新しいことできるはずはないんだ。創意工夫なんてできるわけがないんだ。とにかく問題、悩み、苦しみは、原理からいって、自分を成長させるために出てきてくれておるのである。だから、逃げたらいかん。その逃げない、向かっていくって、この気迫がね、深さというものをつくってくれる。根が真っすぐに伸びていく。そういうこの深さをつくる基本原理であります。**

**深さを持った人間になりたいと思ったならば、われわれは、自分の人生から出てくる、会社の内部から出てくる、さまざまな人間関係から出てくる問題、苦しみ、悩みから逃げたらいかん。逃げずに向かっていくという、この気迫をですね、忘れてはならない。だから、逃げないだけでは、成長しない。その問題を乗り越えなければ、成長できない。じゃあ、どうしたら乗り越えられるのか。乗り越えるためには、必ず覚えてなきゃならない方程式がある。自分が悩みを持ったならば、悩みながら考えたらいかん。どうするかといったら、この悩みがもし他人の悩みであったとして、他人からどうしたもんだろうねと相談されたら、俺はその他人にどう答えてやるだろうかというふうに持っていかないと、正しい回答は出てこないんだ。悩みながら考えたら、あり地獄だ。八方ふさがりになってしまう。例え考えて答えを出しても、全部、間違ってるんだ、それは。自分の悩みに、問題に答えを出そうと思ったならば、悩みながら考えたらいかん。子どもの問題でも、夫婦の問題でもね、会社の問題でも、絶対、悩みながら考えたらいかん。他人から相談されたらというふうに持っていったら、必ず正しい回答、名案が出る。**

**会社の経営でもですね、相当立派な社長さんでもね、自分の会社の中から出てくる問題には、自分で対応できないんですよ。ついつい、経営コンサルタントを呼んでくるんですね。本当、経営コンサルタントは、そう大した経営コンサルタントじゃなくってもね、その他人ごとですからね、こうしなさいって、簡単に言ってしまうんですよ。相当、立派な社長さんでも、自分がその会社の問題で悩んで、考えてると、名案は出ない、絶対に。八方ふさがりになるんですよ。これ、理性の使い方が間違ってるんだ。必ずこの悩みは他人の問題、他者の問題だったとして、どうしたらいいでしょうねと、俺に相談されたら、俺はどう言ってやるだろうかと思ったら、自分の会社の問題に対して、社長さんは自分で答えが出せる。部長さんも、課長さんも、自分の悩みに対して、自分で答えが出せる。悩みながら考えてしまうと、誰かに相談せんといかんようになってくるんですよ。**

**夫婦げんかは犬も食わんって、夫婦はちょっとした問題で、がっとけんかしてるんですけどね、他人から見たら、何をばかなことでやってるのと、こう、本当にばかばかしくなるっちゅうか、本当にこう、何やってんのって言いたくなるようなことなんですね。他人の目で見たらそう見える。途端に問題が解決できる。これは理性の使い方の問題なんだ。例えばの話がですね、これも何回も、もうお話をしてることなんですけど、深い森の中に迷い込んでしまったとする。深い森の中に迷い込ん悩んでる状態でね、どちらのほうに進んでいったら、その森から早く出られるかな、どんだけ考えてもね、答え出るはずはない。例え答えを出しても、全部間違いなんだ。本当はわからんのですからね。深い森の中に迷い込んでしまった状態で、どちらのほうに進んでいったら、早く出られるかわからへん。わからへんのに、答えを出しても間違ってるんだ。じゃあ、どうしたら答えが出るのかといったらね、深い森の中に迷い込んでしまった場合には、その森の中に生えておる一番高い木のてっぺんに登って、一番高い木のてっぺんから、森全体を外から眺めるならば、そこにおるんやったら、こう行ったらそこへ出られると、一発で答えが出るわけですよ。これが理性の使い方なんだ。**

**悩みのどつぼにはまって、悩みながら考えたらいかん。この悩みは他人の問題だったとして、他人からその悩みで相談されたら、俺はその人にどう言ってやるだろうかと思ったら、大人ならね、大人なら、誰でも、自分ならこう言うだろう、こうやってみたらって言うだろうという答えがすぐ出るんですよ。だから、悩みながら考えたらね、なんで八方ふさがりになるのかといったら、どんなことでもね、人間のすることっちゅうのは、プラスばっかりはないし、マイナスばっかりはない。プラス、マイナス、半分ずつなんですよ。小泉改革といったってね、小泉さん、どんないい改革してもね、改革というものは、改革の結果、得をする人間と損をする人間、半分ずつ出てくるようになってるんですよ。どんなことをしても、半分の人間からは恨まれる。半分しか喜ばへん。それが人間のする行為なの。いいことばっか、悪いことばっかはないんだ。何をしても、必ず変化をつくり出せば、損をする人間、特をする人間、半分出てくる。それが人間の社会だ。悩みながら考えるとね、悲観的になってますからね、こんなことをしたら、あの人に迷惑が掛かってしまうしな。こんなことをしたら、隠しておきたいことがわかってしまうしな。こんなことをしたら、また新しいこんな問題が出てくるしな。全部マイナス面ばっかりこう、出てきてしまうんだ。何をやっても全部、駄目。もう俺が死ぬっきゃないかになるんですね。もう俺が死ぬっきゃないかっちゅうことになってですね、もう俺は死ぬしかないんやって、他人が言ってきたらね、そうか、じゃあ、死ねよとは言いませんからね。まあ、待てよというのが、他人ごとなんですよ。自分ごとで考えたら、もう死ぬっきゃないという場合でもね、他人から相談されたら、必ずね、まあ、待てよって言うんですよ。自分だったら、死ななきゃ、死ぬしかないと思っておってもですね、他人ごとだったら、他人ごとですからね、気楽なもんですから、他人ごとは。まあ、待てよ。死ぬ気になったら、なんでもできるやないかって、そういう他人行儀なことが言えるんだ。それが理性の価値なんだ。客観的にものを見るね、理性の価値。客観的に見なけりゃ、答えは出ないのが理性なの。この理性の使い方というものをね、ちゃんとちゃんとの味の素って、ちゃんとわかってないとね、人間、自ら、あり地獄に陥るんですよ。人生の苦しみから脱却できない。そうやって乗り越えて、人間は深さというものを獲得するんです。**

**最後のこの人間の大きさですね。これ、大きさというのは、これはね、人格の高さ、深さは自分だけの努力でできるんだ。だけど、人間の人格の大きさとかね、この広さという、この人格の大きさというのは、これは人生の修羅場、人間関係の修羅場を通り抜けてこないとできない。人間関係の修羅場、他人との対決が必要なんだ。この大きさをつくるためにはね。人間の大きさというこの人格の実力をつくるためには、人間関係の修羅場を通り抜けてこないと、絶対無理だ。器が大きいとかね、度量が大きいとか、包容力があるとか、統率力があるとか。その力はね、観念では駄目、自分だけでは駄目。人間関係の修羅場というものをね、この通り抜けてきた人間しか、この大きさは、実力としてはつくれません。だけども、その実力をつくるね、基本原理はなんなのかといったらね、これは対立をどう乗り越えるかの問題なんですよ。対立を乗り越えるための基本原理はね、なんなのかといったら、対立というものは、確かに嫌なもんだけど、だけども、対立というものは、自分が成長するために、学び取らなければならないものを持ってる人間は誰であるか、教えてくれる現象が対立なんだ。**

**対立というのは、相手が自分にないものを持ってるから、対立するんだ。考え方が違うから、立場が違うから対立する。だから、その対立というのは、自分にないものを相手が持ってるから、対立するんだ。自分が成長するためには、自分にないものを持ってる人間と付き合って、自分にないものを相手から学ばないと、自分は成長できない。だから、対立というのは、どういうふうに解釈したらよいのかといったら、対立というのは、自分が成長するために学び取らなければならないものを持ってる人間が誰であるかを教えてくれる現象が対立だ。われわれは、対立を経験することなしには、自分が学び取らなければならないものを持ってる人間は誰であるかを知ることができない。そういうふうに対立を解釈したときに、初めてわれわれは、対立しながらも、その対立を乗り越えていって、そして、相手から何かを学んで、自分を成長させていくという、そういう力を持つことができる。そのとき、人間は人間の大きさを獲得するんですよ。相手を自分が包み込んでいくというね、力をそこから獲得するんだ。そういうふうにして、だんだん、だんだん、大きさのある人物ができてくるんですよ。**

**これもやっぱり、３時間もかかりますからね、こんな５分か10分で話せることではないので、また来年ね、もしチャンスが与えられたら、また詳しいお話をしたいと思うんですけど、だから、そういうね、ことをちょっとこう、頭に置きながら、職場の中で出てくるさまざまな人間関係、さまざまな問題というものを自分の成長の糧にしながらですね、頑張ってみてもらいたいと思います。どうもありがとうございました。**